大学連携会議「学輪 IIDA」全体会
～公開セッション～

日時：平成 25 年 1 月 26 日（土）　　午後 1 時 45 分開会

場所：飯田女子短期大学

【日　程】

【開会】13:45～14:00
①開会挨拶　　②来賓紹介

【大学の実践事例報告会】　14:00～15:20
①シャレット・ワークショップの取組について
豊橋技術科学大学　建築・都市システム学系　大貝 彰　教授
②デジタルプラネタリウム共同プロジェクトの取組について
和歌山大学観光学部　尾久土 正巳　教授
③参加型地域社会開発（PLSD）研修の取組について
日本福祉大学社会福祉学部　大濱 裕　准教授

◆休憩（10 分間）

【学輪 IIDA プロジェクト会議の報告】　15:30～16:30
①共通カリキュラム構築プロジェクト
立命館大学政策科学部　平岡 和久　教授
②飯田工業高校後利用プロジェクト
追手門学院大学社会学部　小畑 力人　教授

◆休憩（10 分間）

【パネルディスカッション】　16:40～17:40
①テーマ:「地域と大学との連携による地域づくりの可能性について」
②コーディネーター：飯田市長　牧野 光朗
③パネリスト：東京農工大学大学院　朝岡 幸彦　教授
飯田女子短期大学　高松 和子　教授
南信州・飯田フィールドスタディ　桑原 利彦　講師

【閉会】17:40

【目　次】

○　参加者名簿（先生方・来賓等）　・・・　Ｐ１～
○　大学の実践事例経過報告　・・・　Ｐ７～
○　学輪 IIDA プロジェクト会議報告　・・・　Ｐ38～
○　パネルディスカッション資料　・・・　Ｐ65～
○　平成 25 年年頭所感及び市政経営の方向について（概要）　・・・　Ｐ67～
○　総務省からの施策紹介　・・・　Ｐ75～

大学連携会議「学輪IIDA」全体会

公開セッション　参加者名簿　　(先生方・来賓など)

【学輪IIDAメンバー】

出席	氏　名	大学名・学部名	職位
	岩崎　正弥	愛知大学地域政策学部	教授
○	新井野　洋一	愛知大学地域政策学部	教授
	戸田　敏行	愛知大学地域政策学部	教授
○	黍島　久好	愛知大学地域政策学部	研究員
○	川上　恒夫	飯田女子短期大学家政学科	教授
○	松崎　行代	飯田女子短期大学幼児教育学科	教授
○	新海　シズ	飯田女子短期大学家政科学	教授
○	青木　伸一	大阪大学大学院工学研究科	教授
○	堀口　朋亨	大阪市立大学都市研究プラザ	特任講師
○	小畑　力人	追手門学院大学社会学部	教授
	伊東　理	関西大学文学部	教授
	野間　晴雄	関西大学文学部	教授
○	高島　知佐子	京都外国語大学外国語学部	講師
	諸富　徹	京都大学大学院経済学研究科	教授
	蘭　信三	上智大学外国語学部	教授
	大杉　覚	首都大学東京大学院社会科学研究科	教授
○	脇若　弘之	信州大学工学部	教授
○	中島　厚	信州大学大学院理工学系研究科	教授
	田中　清	信州大学工学部	教授
	酒匂　信匡	信州大学大学院電気電子工学専攻	准教授
	佐々木　茂	高崎経済大学地域政策学部	教授
	河藤　佳彦	高崎経済大学地域政策学部	教授
	片岡　美喜	高崎経済大学地域政策学部	准教授
	味水　佑毅	高崎経済大学地域政策学部	准教授
	手塚 章	筑波大学大学院生命環境系	教授
	呉羽正昭	筑波大学大学院生命環境系	教授
○	兼子　純	筑波大学大学院生命環境系	助教
	山下亜紀郎	筑波大学大学院生命環境系	助教
	牧野　篤	東京大学大学院教育研究科	教授
○	友田　清彦	東京農業大学国際食料情報学部	教授
○	寺内　光宏	東京農業大学国際食料情報学部	教授
○	千賀　裕太郎	東京農工大学大学院農学研究院	教授
	土屋　俊幸	東京農工大学大学院農学研究院	教授
○	朝岡　幸彦	東京農工大学大学院農学研究院	教授
○	榎本　弘行	東京農工大学大学院農学研究院	専任講師
○	小林　正夫	東洋大学社会学部	教授
	井口　貢	同志社大学政策学部	教授
	多田　実	同志社大学政策学部	教授
○	大貝　彰	豊橋技術科学大学建築・都市システム学系	教授
	山田　聖志	豊橋技術科学大学建築・都市システム学系	教授
	松島　史朗	豊橋技術科学大学建築・都市システム学系	教授

出席	氏　名	大学名・学部名	職位
○	浅野　純一郎	豊橋技術科学大学建築・都市システム学系	准教授
	増田　幸宏	豊橋技術科学大学建築・都市システム学系	准教授
○	谷　武	豊橋技術科学大学建築・都市システム学系	助教
	林　良嗣	名古屋大学大学院環境学研究科	教授
	中村　英樹	名古屋大学大学院工学研究科	教授
	加藤　博和	名古屋大学大学院環境学研究科	准教授
○	Emanuel　Leleito	名古屋大学工学研究科	講師
○	大濱　裕	日本福祉大学社会福祉学部	准教授
	江原　隆宜	日本福祉大学社会福祉学部	助教
	石神　隆	法政大学人間環境学部	教授
	小門　裕幸	法政大学キャリアデザイン学部	教授
○	酒井　理	法政大学キャリアデザイン学部	准教授
	西澤　栄一郎	法政大学経済学部	教授
○	高柳　俊男	法政大学国際文化学部	教授
	中嶋　聞多	法政大学大学院政策創造研究科	教授
	宮木　いっぺい	法政大学大学院政策創造研究科	准教授
	横井　勝彦	明治大学商学部長	教授
	大友　純	明治大学商学部	教授
	小川　智由	明治大学商学部	教授
	水野　勝之	明治大学商学部	教授
	竹本　田持	明治大学商学部	教授
○	福島　茂	名城大学都市情報学部	教授
○	井内　尚樹	名城大学経済学部	教授
	名主川　久仁	立命館アジア太平洋大学学長室	課長
	有井　健	立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部	准教授
○	銭　学鵬	立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部	助教
○	平岡　和久	立命館大学政策科学部	教授
○	森　裕之	立命館大学政策科学部	教授
○	廣岡　裕一	和歌山大学観光学部	教授
○	尾久土　正巳	和歌山大学観光学部	教授
○	藤田　武弘	和歌山大学観光学部	教授

【来賓・その他】

牧　慎太郎	総務省地域自立応援課課長
金丸　弘美	食環境ジャーナリスト
小澤　一郎	(財) 都市づくりパブリックデザインセンター理事長
唐木　重典	(株) NTTデータグループ経営企画本部業務改革推進部部長
代田　昭久	杉並区立和田中学校校長
大西　達也	日本政策投資銀行地域企画部課長
萩本　範文	多摩川精機株式会社代表取締役社長
木下　守夫	下伊那地方事務所副所長

【パネルディスカッションパネリスト】

高松　和子	飯田女子短期大学学長職務代理
桑原　利彦	IIDAWAVEヘッドプロデューサー

飯田女子短期大学　〈案内図〉

◆男子トイレの数が少ないため、混み合う可能性があります。

◆敷地内（敷地内道路、駐車場、施設内）は、全て禁煙です。

ご理解の上、ご協力をお願いいたします。

平成24年度にフィールドスタディなどで飯田市を訪れた大学の取組事例

（企画課把握分）

事業名	日 程	大学名･先生方	目 的	主な内容	参加人数
京都大学経済学部 諸富ゼミ学習会	4月27日（金）	京都大学経済学部 諸富教授	ゼミ生の新人歓迎合宿として飯田を訪れ、主に飯田における環境政策を中心に学習する	【初日】牧野市長による講演会、温対課田中補佐による再エネ促進政策の説明、エコハウス見学、おひさま進歩エネルギー株式会社原社長による説明、市長との交流会 【2日目】慶應大学とのインゼミ準備	30
筑波大学大学院 地誌学野外実験	5月27日（日） ～6月2日（土）	筑波大学大学院 生命環境科学研究科 呉羽教授　兼子助教 山下助教　ほか	筑波大学大学院生命環境科学研究科の「地誌学野外実験」による現地調査のため	2011年度の調査を継続し，地域の産業・生活・環境と人間の関わり，都市構造等に関する11テーマの現地調査を実施。	37
東京農工大学 地域社会システム 調査実習	第1回 6月23日（土）～ 24日（日） 第2回 7月21日（土） ～22日（日）	東京農工大学 地域生態システム学科 千賀教授・朝岡教授 土屋教授・榎本講師	持続可能な社会を実現するためには、人々が暮らし・働く地域社会そのものが持続可能でなければならない。急激な開発や過疎化・過密化によって多くの地域社会が、そのコミュニティとしての機能を失いつつある。この授業では、持続可能な地域社会を実現するために何が求められているのかを、社会調査という手法を通して学ぶ	【第1回】・市長講義 ・中心市街地活性化の取組について ・農家民泊 ・りんご並木まちづくりネットワークの取組 ・上村地区の概要について 【第2回】・橋南夏まつりへの参加協力 ・知久町商店街への聞き取り調査 ・上村4地区への聞き取り調査 ・上村の若者達との交流会	58
豊橋技術科学大学 飯田サテライト・ラボ　第7回 「飯田を知ろうプロジェクト」	6月29日（金）	豊橋技術科学大学 大貝教授・浅野准教授 谷助教・豊橋高専	飯田サテライトラボの取組みの一環として，シャレットワークショップ実施のための旧飯田測候所及びその周辺エリアの事前調査	飯田市関係各課から対象地域の説明を受けるとともに，現地の街歩きを行った。	12
豊橋技術科学大学 シャレットワークショップ	8月16日（木） ～20日（月）	豊橋技術科学大学 大貝教授・浅野准教授・谷助教長野高専　豊橋高専	飯田サテライトラボを活用した大学院レベルの実践的教育の効果検証と高専連携の推進及びそのプログラム創出。	旧飯田測候所の活用策及びその周辺エリアの活性化をテーマに，４つのグループに分かれて，現地調査，課題把握，活用策や活性化策の提案をパネルや模型としてまとめ，地元住民に対して発表した。	37
豊橋技術科学大学 大貝研究室ヒアリング調査	10月29日（月）	豊橋技術科学大学 大貝教授	広域圏計画策定とその実践の実態を調べ、我が国における今後の広域ガバナンスの在り方を探る研究の一環	広域連合や定住自立圏構想など先進的な取組を進めている飯田市及び南信州広域連合に対するヒアリングを実施した。	4
南信州・飯田 フィールドスタディ （第1回共同FS）	8月4日（土） ～7日（火）	法政大学人間環境学部 辻教授 立命館アジア太平洋大学 銭助教 名城大学経済学部 井内教授 愛知大学経済学部 黍嶋先生 法政大学キャリアデザイン学部 酒井教授	環境・産業・自治・まちづくりなど様々な分野において、地域の社会環境や自然環境を直接肌で感じながら、他大学の学生との共同学習・交流の機会や、地域住民との学習交流（住民等が講師となる学習や実体験）を通じて自らの問題意識を高めていただく3泊4日の学習プログラム 飯田のまちづくりについて学生達に学んでいただき、最終日には学生達の視点で飯田の今後の取組について提案いただく	・市長講義（文化経済自立都市への挑戦） ・いいだ人形劇フェスタ観劇、飯田りんごんへの参加　・いいだ人形劇フェスタの取組 ・おひさま進歩エネルギー(株)の取組 ・オーケストラと友に音楽祭の取組 ・地域自治と公民館活動 ・地域ぐるみ環境ISO研究会の取組 ・体験修学旅行について　・蕎麦打ち体験 ・新しいまちづくりのカタチ ・経済自立度向上に向けた取組 ・農家民泊・飯田への提言　など	74

事業名	日 程	大学名･先生方	目 的	主な内容	参加人数
東京農業大学 食料環境経済学科 友田ゼミフィールド研修	8月4日（土） ～9日（木）	東京農業大学 国際食料情報学部 友田教授	本学食料環境経済学科における実学主義の教育目的の効果を上げるために設けられている必修科目で、学生が農業や食品産業と結びついた体験学習を行うことを通じて、勤労と責任を重んずる人間形成を図ることを目的とする	食料環境経済学科２年次の開講科目で、事前に予備学習を行ったのち、飯田市内の農家に分宿して、生活をともにしつつ体験学習を行い、研修後にはレポートを提出する。優秀レポートについては、本学科が毎年刊行する研修成果報告書『大地に学ぶ』に掲載する。	20
立命館大学政策科学部2回生 研究入門フォーラム	8月6日（月） ～７日（火）	立命館大学政策科学部 平岡教授	東日本大震災における飯田市の被災者受け入れ・支援に関する調査	2回生の「被災者支援プロジェクト（長野・新潟」」における調査の一環として、飯田市・南信州の取り組みや被災者の実情・課題を把握した。	8
立命館大学大学院 地域共創プログラム研修	8月3日（金） ～9月6日（木）	立命館大学政策科学部 平岡教授	大学院生を約１カ月飯田市役所に研究型インターンとして派遣し、行政の現場に密着した研究を行う	男女共同参画課と地域づくり・庶務課に派遣し、「住民活動と地域づくり」、「外国人子女への就学支援」をテーマに研究を進めた。	2
法政大学経済学部 西澤ゼミフィールドワーク	8月20日（月） ～23日（木）	法政大学経済学部：西澤教授	上村地区の小水力発電の取り組みに関する調査	小沢川の小水力発電所建設予定地の見学、住民の方への聞き取りと学生の発表	20
学輪IIDA 共通カリキュラム実証実験 （南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ）	8月27日（月） ～8月30日（木）	立命館大学政策科学部 平岡教授・森教授 名城大学都市情報学部 福島教授 和歌山大学観光学部 藤田教授・廣岡教授	学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトで検討している「モデルカリキュラム実証実験」として実施。この地域には豊かなソーシャルキャピタルの蓄積や維持・発展する規範や仕組みがあるという仮説のもと、大学生達がこの地域における住民自治や公民館活動に関する調査、様々な分野における実践者たちとの学習や交流などを通じて、持続可能な地域づくりとソーシャルキャピタルとの関係について検証する。	・地域自治と公民館を考える ・「柳田國男の『都市と農村』から読み取る飯田地域の可能性」 ・ソーシャルキャピタル論 ・公民館、住民自治活動に関するフィールドスタディ、ワークショップ ・市長講義（文化経済自立都市への挑戦） ・ソーシャルキャピタルと文化、環境、まちづくりへの発現に関する調査　・農家民泊 ・総合発表会　・パネルディスカッション	29
法政大学SJ国内研修	9月4日（火） ～12日（水）	法政大学国際文化学部 高柳教授　曽教授	留学生を主対象とする「ＳＪ（StudyJapan）国内研修」の一環。体験学習も取り入れながら、日本を東京だけではなく、地方の視点から多面的に考察する	満蒙開拓団や在住外国人の現状など、この地域の国際関係や多文化共生を中心として、文化活動や自然との共存の営みを、講義受講と現地訪問により幅広く学ぶ。飯田市内（美博、歴史研究所、川本喜八郎、竹田人形座、今田人形、公民館、下栗の里、そば打ち体験など）のほか、喬木村（椋鳩十）、泰阜村（学校美術館、だいだらぼっち）、天龍村（平岡ダム）を訪問。	8
東京農業大学 ワーキングホリデーに関する調査研修	9月5日（水） ～9日（日）	東京農業大学国際食糧情報学部国際バイオビジネス学科 鈴村准教授	東京農業大学　鈴村ゼミ研修	ワーキングホリデー飯田 （梨収穫ほか援農ボランティア）	16

事業名	日 程	大学名･先生方	目 的	主な内容	参加人数
南信州・飯田 フィールドスタディ （第２回共同FS）	9月12日（木） ～15日（土）	東洋大学経済学部 小林教授 東京農工大学農学部 大阪市立大学 堀口特任講師　長尾教授 京都外国語大学 高島専任講師 名城大学経済学部 井内教授 豊橋技術科学大学 大久保講師 法政大学キャリアデザイン学部 酒井教授	環境・産業・自治・まちづくりなど様々な分野において、地域の社会環境や自然環境を直接肌で感じながら、他大学の学生との共同学習・交流の機会や、地域住民との学習交流（住民等が講師となる学習や実体験）を通じて自らの問題意識を高めていただく3泊4日の学習プログラム。 飯田のまちづくりについて学生達に学んでいただき、最終日には学生達の視点で飯田の今後の取組について提案いただく。	・市長講義（文化経済自立都市への挑戦） ・いいだ人形劇フェスタの取組 ・おひさま進歩エネルギー(株)の取組 ・オーケストラと友に音楽祭の取組 ・地域自治と公民館活動 ・地域ぐるみ環境ISO研究会の取組 ・体験修学旅行について ・新しいまちづくりのカタチ ・経済自立度向上に向けた取組 ・ワーキングホリデーについて ・名勝天龍峡・百年再生館とご案内人の取組 ・農家民泊　　・蕎麦打ち体験 ・飯田への提言　など	56
立命館大学政策科学部3回生 平岡ゼミ	9月11日（火） ～13日（木）	立命館大学政策科学部 平岡教授	3回生の個人研究における飯田市調査	産業クラスター、ワーキングホリデー、災害時要援護者支援、りんご並木のまちづくりについて、担当者へのヒアリング	8
東京大学教育学部 牧野ゼミ 飯田フィールドスタディ	9月26日（水） ～29日（土）	東京大学教育学部 牧野教授・李准教授 新藤講師	この地域における様々な住民主体の活動について現地学習を実施。 学生達が、社会の自立とはどうあるべきであるのかを、飯田における様々な事例を通じて学び考え、学生の視点で提言・報告する。 最終的に報告書を作成し、飯田での調査報告会を実施する。	・飯田市の社会教育行政と生涯学習に関する事業について　・地区公民館や分館活動 ・いいだ人形劇フェスタの取組　・オーケストラと友に音楽祭の取組　・ワーキングホリデーの取組 ・伊那谷自然友の会の活動　・朗読奉仕の会「声の輪」の取組　・飯田風越高校生達との交流会 ・子育てネットワーク「すくすくの樹」の取組 ・おもしろ科学工房の取組　など	33
東京農業大学 食料環境経済学科 堀田ゼミフィールド研修	11月8日（木） ～14日（水）	東京農業大学国際食糧情報学部食料環境経済学科 堀田教授	東京農業大学フィールド研修	ワーキングホリデー飯田（市田柿収穫、吊るし作業ほか援農ボランティア）	22
名城大学経済学部 「社会フィールドワーク」	12月20日（木）	名城大学経済学部 井内教授・西山教授	循環型地域経済を考える、半期の授業(フィールドワーク)のうちの一部を飯田市にて実施。飯田市の先進的取り組みから学ぶ	・飯田市の市政概要　・エコハウス見学 ・ひさかた風土舎の講義　・おひさま進歩エネルギー(株)の講義　・メガソーラー見学	42
豊橋技術科学大学 浅野研究室	1月18日（金）	豊橋技術科学大学 浅野准教授	田園地域における土地利用管理に関する研究の一環	飯田市土地利用基本条例及び自治基本条例の運用状況に関するヒアリング	2

※上記以外にも多くの大学が調査・研究・学習の機会として飯田市を訪れています

大学の実践事例

報告資料

第3回学輪IIDA・事例報告
「飯田サテライトラボを拠点とした実践的技術者教育の実験的取組」
―飯田中心市街地活性化を考えるシャレットワークショップ―

南信州広域連合「第3次広域計画」より

2013年1月26日（土）
大貝　彰
豊橋技術科学大学

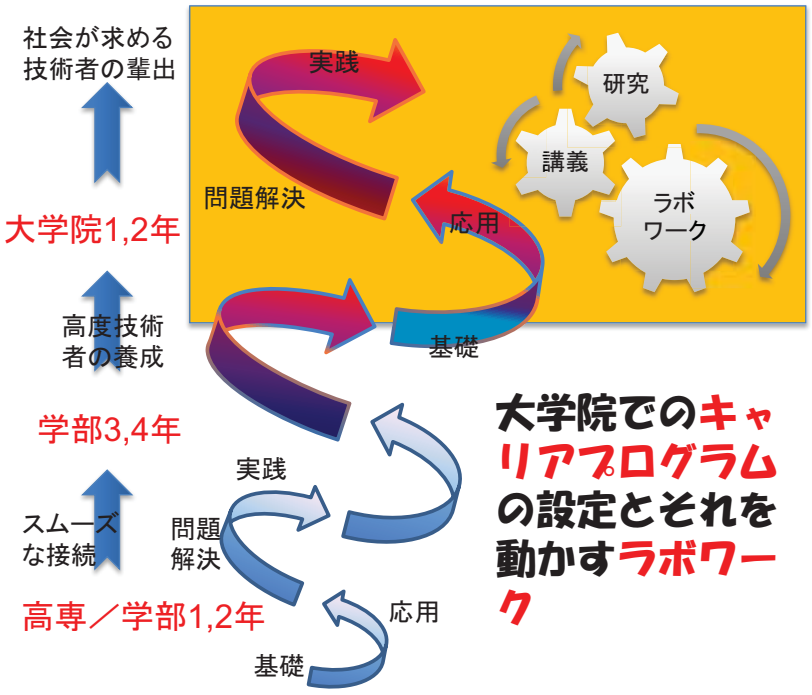
H18-22：研究プロジェクト「県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン」
H22-24：高専教育と連続する「らせん型技術者教育」モデル　～持続社会を創造する実践的建築・都市デザイナーの養成～
H22.10-：飯田サテライトラボを拠点とした教育実践

取組みの背景について

技術者教育プロジェクト

高等専門学校教育と連続する「らせん型技術者教育」モデル

社会が求める技術者の育成



大学院でのキャリアプログラムの設定とそれを動かすラボワーク

●オンキャンパス・ラボ

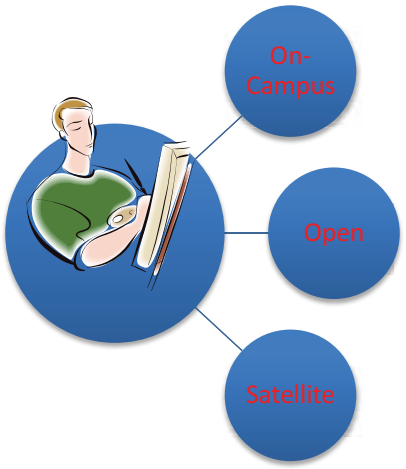
大学を実験フィールドとしたデザインや研究を通した実践的教育

●オープン・ラボ

地域や高専に開かれた場の提供と共同研究を通した実践的教育

●サテライト・ラボ

地域の中での活動を通した課題解決型の実践的教育



飯田サテライトラボを拠点にした取組み

南信州・飯田を拠点に，近隣の工業高等専門学校とともに，地域の課題を題材に，地域の皆さんと協働で教育・研究を実践していく，その拠点として，長野県立飯田工業高等学校同窓会（財団法人飯工会）の爽風会館にサテライトラボを設置（平成22年10月末）

取組み内容

①飯田を知ろうプロジェクト

・建築・都市に関わる地域の現状と課題について大学と地域で意見交換を行う定例会を開催，新規プロジェクトを考える。

・想定されるテーマ（中心市街地活性化，水環境保全，中山間地域問題，耐震化，歴史と文化，etc.）

②高専連携教育プロジェクト

・山から海までの一貫した土砂管理

・河川の水質汚濁とその流出源

飯田サテライト･ラボ　H23年度活動報告

【概要】平成22年10月に設置した飯田サテライト・ラボを拠点に飯田市と地元団体等の協力を得ながら「飯田を知ろうプロジェクト」研究会を3回実施した。また長野高専と連携して教員3名，学生22名が参加した「飯田りんご並木をデザインするシャレットワークショップ」を実施，サテライトラボを活用した生の地域課題を取り上げ，地域の実務者を講師・アドバイザーとした実践的な都市地域プランナー養成の教育モデル構築に向けた実験的取組みへ展開できた。

飯田を知ろうプロジェクト

サテライトラボを拠点に，飯田・南信州地域を題材にした新たな教育研究プロジェクトの推進に向けて，昨年度から継続して3回の研究会を実施した。

第4回「飯田の中心市街地活性化を考える」

全国の中心市街地活性の取組の先駆けとなった飯田市の取組を学習，街歩きと意見交換を実施

左：（株）飯田まちづくりカンパニー三石氏の講演会，右：意見交換会の様子

第5回「エコハウスの実態と今後の展望」

環境共生型建築・都市づくりに関するプロジェクト・研究の事例紹介や意見交換を通して，地域の環境に適応した建築・都市の未来像を探る。

左：太陽光発電施設の見学会の様子

第6回「海と山のつながりを考える」

天竜川総合学習館「かわらんべ」にて，天竜川の歴史，三六災害，治水対策，天竜峡エコバレー事業などを学び，遠州灘の海岸浸食と河川の土砂問題の関係を考えました。

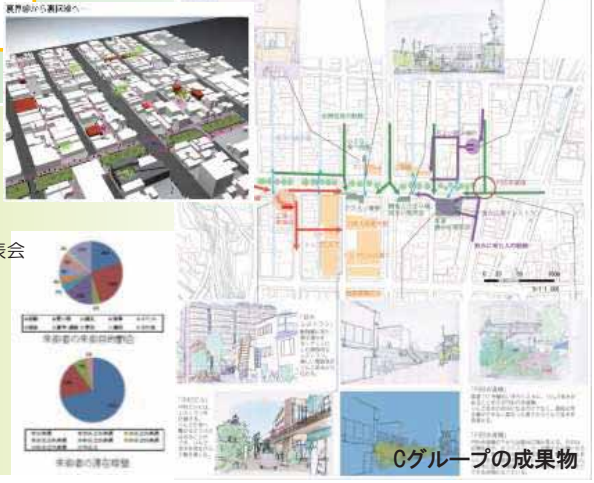
飯田りんご並木をデザインするシャレットワークショップ

9月6日午後から9月9日にかけて短期集中型で実施。学生自らが手足を動かしりんご並木周辺の街歩きや資料収集を行い，フレッシュな頭をフル回転させながらディスカッションを繰り返して，アイデアや提案シナリオをまとめ，それらをプレゼンテーションし，りんご並木の活性化に向けたデザイン提案にチャレンジした。

エコハウス前のりんご並木

市長も参加した最終成果発表会

徹夜で作業する学生たち



Cグループの成果物

飯田中心市街地活性化シャレットワークショップの教育上のねらい

PBL教育の一つだが，短期集中で実施

◆いわゆるPBL教育の一つ
◆夏休み期間に4泊5日の短期集中で，
◆グループワークを実施。

◆地域の実課題を取り上げ，現地踏査やヒアリングをし，
◆与えられた課題の掘り下げを行い，学生なりの視点で課題を捉え，その上で，
◆課題解決に向けたアイデア・デザイン（ハード，ソフト両面）についてディスカッションを行い，一定のグループ内合意のもとに，一つの課題解決策のストーリー建てから，空間イメージまでをまとめ，
◆地元の関係者に対してプレゼンテーションする。

学生のもつデザイン力が試される機会

◆わずか5日間の授業
◆しかし，学生からみれば極めて刺激的である。

◆限られた時間の中で，どう課題に向き合い，理解し，アイデアを考え，意見を出し合い，グループとして一つにまとめていくか，その難しさを感じながらも，

◆課題の理解力，自分の知識のフル活用，コミュニケーション力，意見調整能力，プレゼンテーション力といった現在自分が持ち合わせている能力が試される機会である。

平成23年度，24年度実施概要
実施スケジュール
実施の様子をビデオで紹介
最終成果物の例

実施内容を簡単に紹介

平成23年度飯田中心市街地「りんご並木をデザインする」シャレットワークショップ

日時：9月6日14：00～9月9日19：30

場所：飯田市役所，エコハウス他

協力：飯田市，㈱飯田まちづくりカンパニー，地元商業者

参加大学：豊橋技科大・大貝・浅野研究室＋長野高専・柳澤研究室

参加学生：豊橋技科大18名，長野高専生4名，合計22名

平成24年度「旧飯田測候所およびその周辺エリアをデザインする」シャレットワークショップ

日時：8月16日（木）～19日（土）

場所：飯田市橋北公民館

協力：飯田市，橋北まちづくり委員会

参加大学：豊橋技科大・大貝，浅野，谷の3研究室，長野高専・柳澤研究室，豊田高専・加藤研究室

参加学生：豊橋技科大22名，長野高専生3名，豊田高専生5名，合計30名

実施スケジュール

実働時間　3日半＝6＋8×3＝30時間＋約15時間自習（演習2単位相当）

通常授業　1.5時間×15コマ＝22.5時間

2012 年度飯田中心市街地シャレットワークショップ
「旧飯田測候所およびその周辺エリアをデザインする」日程(案)

8 月	全体運営＋教員等	グループワーク
16 THU	10:00~14:00　全員集合（会場 A） 14:00　挨拶（大学，市役所，地元住民） 14:15　全体スケジュール確認とグループ分け 14:25　市役所からの解説（馬場氏他） 17:30　調査報告と討論（会場 A） 18:30　意見交換を兼ねた懇親会（場所未定）	14:50　グループ別街歩き事前打ち合わせ 15:00　街歩き・調査 16:20　（休憩） 16:30~17:30　調査まとめ（会場 A） 夜：提案シナリオ　ディスカッション
17 FRI	（各自朝食） 9:30　集合：17 日の作業確認 10:00　資料デジタル化，パネル・模型材料等の買い出し 14:00　講師集合 全体ミーティング（会場 A） 想定シナリオ・アイデア発表 地元住民との意見交換	（各自朝食） 9:30　集合：17 日の作業確認（会場 B） 10:00　想定シナリオに基づく街歩き 情報収集　アイデア出し （途中適宜昼食） 16:00　提案シナリオ　ディスカッション （講師分担指導）（会場 B） （各自夕食） 夜　基本データデジタル化，模型作成開始
18 SAT	（各自朝食） 追加模型材料等の買い出しなど 講師集合 14:00　全体ミーティング（会場 A） 中間発表	（各自朝食） 9:00　集合：18 日の作業確認（会場 B） 追加情報収集（街歩き，資料） プレゼンテーション作業 （途中適宜昼食） 16:00　プレゼンテーション作業 模型，スケッチ，イラレ作業 パワーポイント作成（会場 B） （適宜夕食） 作業継続
19 SUN	（各自朝食） 9:30　集合：19 日の作業確認 発表会準備（会場 A） 17:30　公開成果発表会（会場 A） ×開会挨拶＋趣旨説明（大貫） ×挨拶：牧野市長，地元代表 ×学生提案発表（4G×15 分） ×質疑，意見交換（30 分） 19:15　閉会（片付け） 20:00　懇親会（会場未定）	（各自朝食） 9:00　集合：19 日の作業確認 プレゼンテーション作業（会場 B） （昼食） 13:00　パネル，模型，PPT 最終チェック（会場 B） 16:00　会場 B の後片付け 17:15　発表準備完了
20 MON	（各自朝食） 解散	（各自朝食） 解散

実施の様子

学生の最終成果物例(H23)

学生の最終成果物例(H24)

学生の評価
教育の特徴と効果
大学と地域の連携からみた効果

取組みの特徴と効果

学生の評価

○学校では体験できない実際の現場と向き合うことが体感できる

大学の講義ではまちづくりや設計の課題はやりますが実際の都市のスケール、現地の住民を相手にしながら課題に向かうことができました。分からないことがあれば住民に聞き、現地に行ってすぐに観察することができます。この一週間で成長する速度は大学の授業の非にならないと思います。

○学生が全く知らない土地に入って、都市開発の提案を行うという取り組みはとても斬新

○大学の設計課題とは違い、グループで、それも**会って間もない高専生や、設計を今までしたことがない人と一緒に行い**、その上**4日間という時間のない**中で模型まで完成させないというスケジュールで・・・・　対象敷地がすぐそばで、・・・・，議論する際も、模型をつくる際も、皆の考えるイメージを共有しやすくする良い要素であった

○短期間に実施され、**現地に留まりそこで生活することで**、より現場の魅力や課題点に向き合うことができました

教育の特徴と効果

通常のPBL教育に加え，次のような特徴をもつ。

○短期集中型

○非日常体験型

○現場と密着した実践教育

教育の特徴と効果

通常のPBL教育の効果（知識・情報の活用力，観察力，課題の分析力，整理統合力，自己表現力，調整力，創造力，デザイン力，プレゼンテーション力）に加え，

◆ **短期集中型**：これまでに身に付けてきた多様な能力を短期間で総動員しなければないない状況に身を置くことで，自分の能力の強み・弱みを確認できる。

◆ **非日常体験型**：通常のキャンパス中心の授業とは異なる，非日常的な場に身を置くことで，与えられた課題に立ち向かう動機や姿勢に積極性が生まれる。

教育の特徴と効果

◆ **現場と密着した実践教育**：

１）昼夜を分かたず現場で作業し，地元住民や行政の方の意見を聞き，地元の空気を吸い，学生同士寝起きを共にすることで，与えられた課題をこなす主体性と集中力が生まれる。

２）最後に不十分ながらもまとめあげた成果を地元の方々の前で発表することで，大きな達成感（小さな成功体験）を得ることができる。

まとめ（大学と地域の連携からみた効果）

- 豊橋ではなく，飯田だからこそ，短期集中の非日常的体験学習が可能。その教育効果は実験的取組みで確認できた。
- 来年度より大学院前期課程の前期授業「都市地域プランニング」（1コマ2単位）として実施予定。また高専連携の手段としても活用。
- シャレットワークショップは，体験型授業であるが，同時に地域貢献の取組みの一環である。大学と地域の双方にメリットをもたらす教育方法である。

展望（大学と地域の連携からみた効果）

I. 学輪IIDAの他大学の人文系学生（経済系，地理系，教育系など）の参加で，真の意味で飯田のまちづくりに貢献できる学生の提案ができる可能性があると考えている。

II. リニア新幹線開業を見据え，「小さな世界都市・飯田」に相応しい国際シャレットWSの実現を目指したい。

何故，そこまでやるか？
飯田が惹き付けるからです。
それ以上の答えは今のところない。

おわり

飯田市美術博物館デジタルプラネタリウムの共同プロジェクト

和歌山大学観光学部／宇宙教育研究所
尾久土正己・吉住千亜紀
and
飯田市美術博物館の学芸員の皆さん

飯田市との出会い

- 牧野さん（現市長）とドイツで一緒に日食観測
  - 当時は私は和歌山の小さな自治体の天文台に
  - その後、ご無沙汰・・・
- 2007年？再会
  - 飯田市長と和歌山大教授になっていた！
  - 協定を結んで連携しましょう！

1999年欧州・西アジア皆既日食

学輪IIDA Iida University Network

プラネタリウムの更新に協力

- 飯田市美術博物館
  - 平成元年開館の総合博物館（美術・人文・自然）
    - 菱田春草のコレクション
    - プラネタリウム館も併設
  - プラネタリウムのシステムが老朽化
    - もっと昔のシステムなら完全機械式
    - この時代のプラはコンピュータ制御（Windows以前）
    - 更新するか、閉館するか・・・
  - 協定している和歌山大学に相談してみよう！

和歌山大学のデジタルドームシアター

目指したのは普通のプラネタリウムやCGシアターではなく、美しい実写のドーム映像

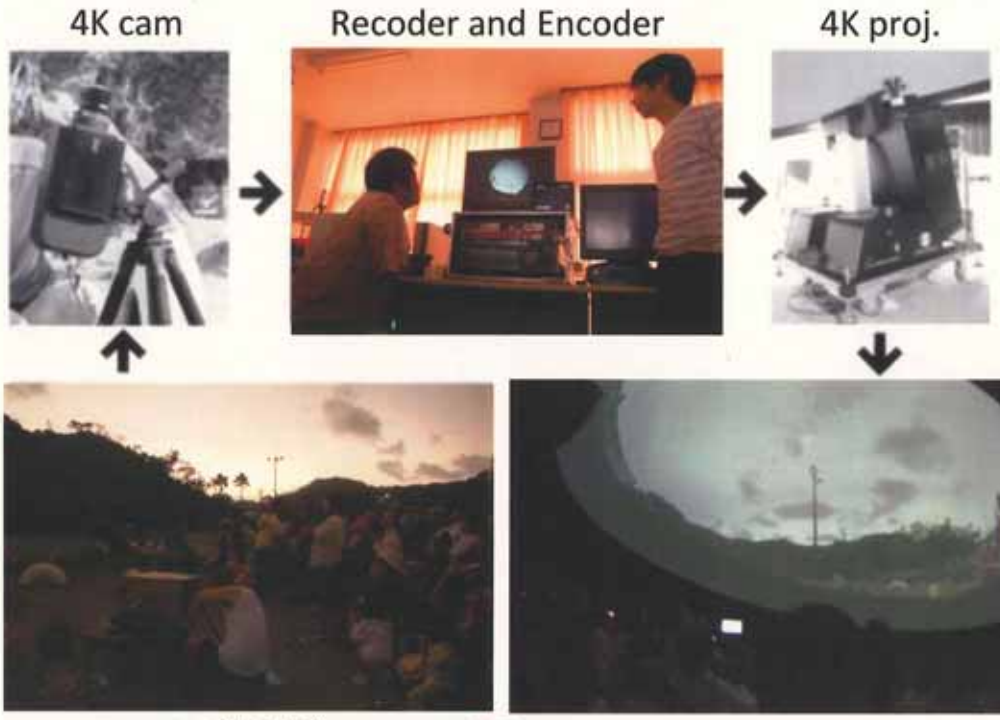
芝居小屋のようなエアドーム

ハイビジョンの4倍のプロジェクター（4K: 2009年時点では世界最先端）

4Kドーム映像を撮影・中継する世界唯一のシステム

2009/7/22 奄美大島から京都へ生中継

そのほか、3箇所のドームにもマルチキャスト



飯田市で使えば
面白いことができるはず？

試しに投影してみましょう！

システムを美博に運んでデモ！

飯田自慢の桜を撮影して投影！

本来、「桜は見上げるもの」だか、通常の映像では前方にしか映像がない！

ドームなら枝垂れ桜はドーム天井から垂れて見える！

共同研究で番組作り

- 2011年春　和歌山大のシステムと同型が美博に設置！
- 通常のプラネタリウム番組に加えて「飯田市のオリジナル番組」を上映
  - 美博の各分野の番組を共同制作
  - 飯田市と大学の間で共同研究を締結
  - 役割分担
    - 美博：テーマの決定、ネタの提供、監修、各種調整
    - 大学：構成、シナリオ、撮影、編集、投影実験

これまでに共同制作した番組

春草

人形劇

埋没林

霜月祭

野鳥

しらびそ高原

隕石クレーター

蝶

ここで終われば
大学はプロダクション？

当然、研究の要素を盛り込む！

無形文化財への応用

「遠山の霜月祭」(国指定重要無形文化財)

- 社殿の中に4Kカメラをセット

- ドーム映像の一例

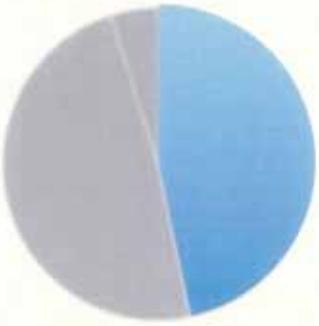
美術博物館での上映でアンケート

- 回答者の年齢層

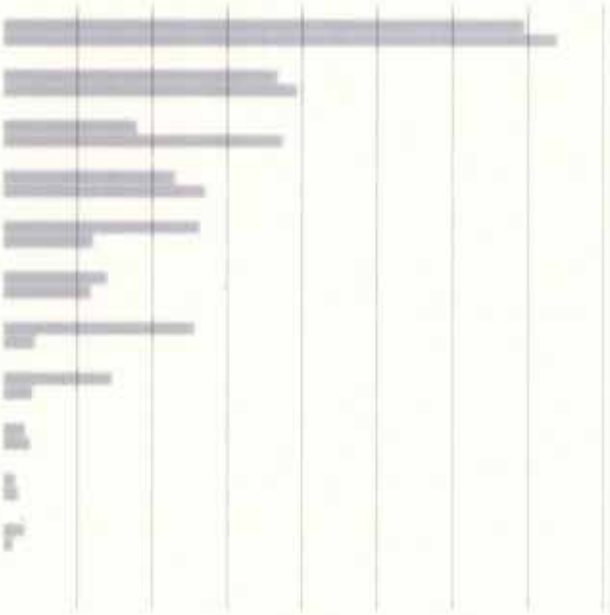
- 番組「遠山の霜月祭」の評価

つづき

- ドーム映像の効果
- 行きたくなったか？



観光資源の中のギャップ



今年秋　民俗芸能学会が美博で

民族芸能の新しい記録・表現方法と
してプラネタリウムの活用を紹介！

飯田の番組からではないが・・・

最近、映像研究の分野で注目すべき
成果が！

ドームの中の人の顔の動きを追跡

典型的な5種類のサンプル映像（各30秒）

人は左右、そして時々後ろを見ている

耳掛け小型カメラで顔の向きを記録

顔の向きの一例（30秒間）

結果

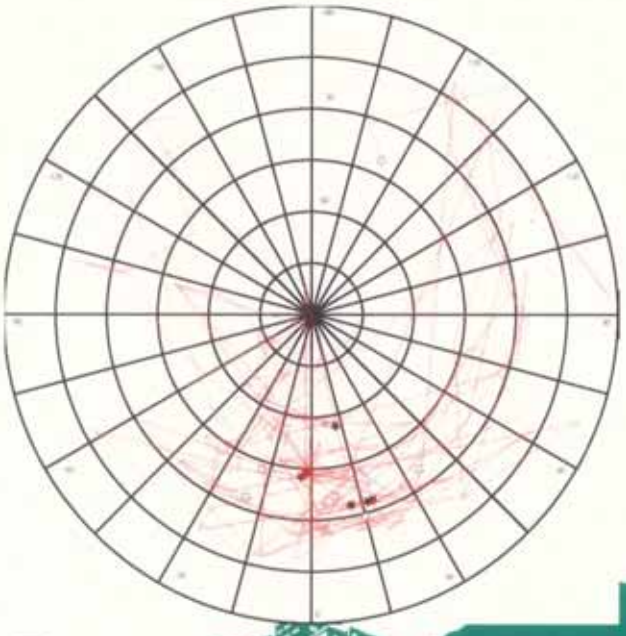
- ドーム映像の場合
  - 映像の中に参加し、能動的に鑑賞している！
  - Participatory Active Viewingと名付けてみた
- 一方で普通の映像の場合
  - 代表者（カメラマン）がアングルを決めて撮影した映像を受動的に鑑賞している
  - Representative Passive Viewing
- 映像に参加することが臨場感につながる
  - より一層、そこへ行ってみたくなる

京都水族館の大水槽の「中」

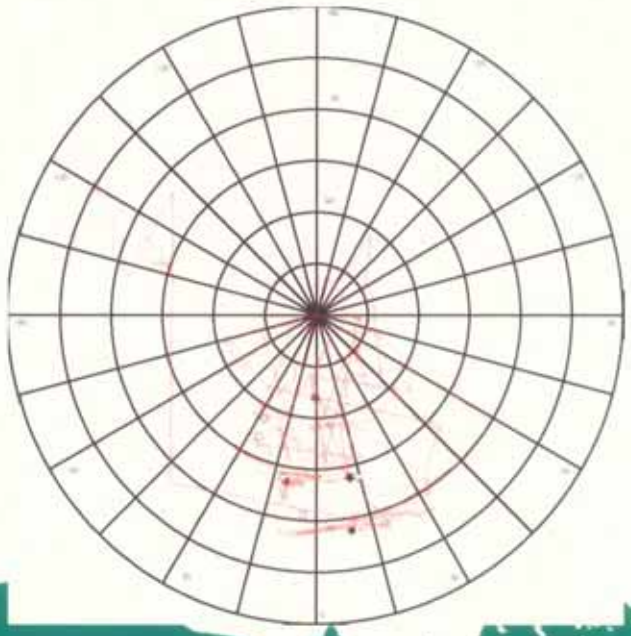
2012/12/4-7　IDW/AD'12のために撮影、京都国際会館で上映

映像の評価の違いによる視聴者の顔の動き

評価高い



評価低い



映像に満足してもらうためには顔の動きを促す仕掛けが必要！

ドーム映像独特の制作のポイントが
次々と明らかになりつつある！

学輪IIDA Iida University Network

現在も新番組を共同制作中

その撮影中に「骨折り」もしました・・・

学輪IIDA Iida University Network

番組作りに住民が参加

現在制作中の「天龍峡水の旅路～時を越えて～」の番組のエンディング。

真っ黒の画面ところは、これから撮影。

歌は仮歌なので、完成版では、映像に登場する住民たちのコーラスになる予定。

地元のNPOと博物館と和歌山大学による共同制作作品。3月末公開予定。

完成度より住民の発想を大切に制作

大学と地域の関係

- よくある大学の地域貢献
  - 地域の声「とにかく若い学生さんたちに来て欲しい」
    - 大学の研究に興味なし？
    - 若者なら大学以外にもいる！
  - 大学の声「うーん、忙しいのになぁ・・・」
    - 研究面で地域で得るものなし？
    - 求められいるものに魅力を感じない！

よくある「まちづくり先進地」の場合

- 大学の声
  - そこへ行けば、色々学べる！
  - 学生の良い教材になる！
- 地域の声
  - たくさん来てくれてうれしい！

- しかし、ここで満足してはいけないのでは？

学輪IIDAでは

- 大学と地域がここで先端、あるいはオンリーワンの研究をする！
  - その地域でしかできない研究テーマ
  - その地域でやりたい研究テーマ
  - その地域がやりたい研究テーマ
  - ・・・
  - 連携することで新しい何かが生まれる
  - その成果が互いの利益になる
- Win-Winな関係こそ、学輪IIDAの目指す形

世界に発信する「ムトス飯田」
～「地域自治」の智慧・経験・仕組み～

日本福祉大学
准教授　大濱 裕

1　飯田市におけるJICA「参加型地域社会開発（PLSD）」研修

（1）飯田市におけるPLSD研修および関連諸活動

1　PLSD研修
- 1998年より現在まで15年間に亘り、JICA「参加型地域社会開発（PLSD）」の現場実践事例として研修員（ｱｼﾞｱ・ｱﾌﾘｶ・中南米・中近東地域の58ヶ国より総計310名）を受け入れ・指導を実施。
- 2006年より上級政策決定者向けPLSD研修（ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ、ﾈﾊﾟｰﾙ、ﾌﾞｰﾀﾝ、ﾀﾝｻﾞﾆｱ等総計80余名）を継続的に受け入れ・指導を実施。

2　海外におけるPLSD現場ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの支援活動
- 2005年～2007年（3年間）に亘り、ﾌｨﾘﾋﾟﾝ国・ｱﾙﾊﾞｲ州・ﾚｶﾞｽﾋﾟ市におけるPLSDﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに地域住民・公民館ｸﾞﾙｰﾌﾟが参加・協働し、現場における「地域自治」の育成・強化を「草の根支援」として展開。

3　飯田市行政および市民向け活動
- 2000年以降、PLSD研修員が上久堅・竜丘小学校、飯田東中学校と訪問・交流。
- 2000年「足下からの国際化研究会」、男女共同参画課に「多文化共生担当」を設置。
- 2011年8月、公民館を中心に市民向け「GNHｾﾐﾅｰ：ﾌﾞｰﾀﾝに学ぶ」を開催・実施。

4　大学教育支援
- 1991年より日本福祉大学学生が PLSD 研修に参加し、ﾌｨﾘﾋﾟﾝ・ﾚｶﾞｽﾋﾟ市の現場で住民参加型開発の実践手法を学び、再び、飯田研修で地域自治を学ぶ教育実践を展開。

1　飯田市におけるJICA「参加型地域社会開発（PLSD）」研修

（2）「参加型地域社会開発（PLSD）」の基本的枠組・視点

1　目的：地域社会の「自立的・持続的」発展を支えてゆく「社会的能力の育成・強化」とそれを担保する「制度ﾒｶﾆｽﾞﾑの構築」を、地域社会の「構造機能的固有性の把握」と「経験に基づく能力・意識・組織・連携の変革」により展開。

2　概念：主概念 ＝ 「地域社会の自己組織力（地域自治）」
副概念 ＝ 「開発３要素（資源・組織・規範）」、「家庭の９構成要素」、「地域社会ｼｽﾃﾑ」、「地域ｺﾐｭﾆﾃｨの機能類型」、「社会領域単位」

3　手法：参加型開発手法： PA（ Participatory Approach ）
地域住民・行政・NGO/NPOの「ｴﾝﾊﾟﾜﾒﾝﾄ」、即ち、「意識化・組織化・能力形成・ﾈｯﾄﾜｰｸ化」を自らの「参加・協働の経験」を通して学び、蓄積し、実現してゆく「ﾌﾟﾛｾｽ」。

3

1　飯田市におけるJICA「参加型地域社会開発（PLSD）」研修

学習発表やゲーム通し

JICA研修員と交流

上久堅小で児童と交流

JICA研修生8人

4

2　飯田市における「地域自治」の智慧・経験・仕組み

（1）飯田市における「地域自治」の分析マトリックス

飯田における地域自治の仕組み

		行政	公民館		地域コミュニティ	JA みなみ信州
資源	人	- 飯田市長、助役、管理職 - 飯田市職員、嘱託	- 飯田市教育長、職員 - 公民館主事	- 公民館館長 - 各種委員会員 - 地域住民	- まちづくり委員会代表・役員 - 地域住民	- JA みなみ信州役員、職員、指導員 - 組合員
	物	- 飯田市施設 （市役所、消防署、警察署、病院、学校、ゴミ処理場等）	- 公民館施設 - 公民館備品	- 公民館備品	- 共有施設・資源 （財産区、水源施設、神社、墓地、水路、浄水施設、公園、集会所 etc.） - 個々の家庭施設・資源	- JA みなみ信州本部施設 - 共同集荷・出荷場 - A コープ店舗、ガソリン給油施設等
	金	- 事業予算（各部局） - 各種補助金、助成金	- 運営資金 - 公民館主事人件費	公民館会費	- 各区の独自財源（集落開発基金） - 自治会費 - 各種負担金・賛助金	- 事業予算・財源 - 組合員費
組織	市	- 市役所 -（市議会）	- 飯田市教育委員会 - 飯田（中央）公民館		- 飯田市まちづくり委員会連絡会議	- JA みなみ信州（広域本部） - 各種生産部会 （果樹、野菜、畜産、きのこ等）
	地区（行政村）	- 自治振興センター - 地域協議会	- 各地区公民館 - 委員会（広報、文化、スポーツ、特別課題）		- まちづくり委員会（総務、環境、安全、福祉、公民館） - 財産区	- JA みなみ信州（地区） - 各種生産部会 （果樹、野菜、畜産、きのこ等）
	区（自然村）	- 連絡員（有給）		- 分館 - 委員会（同上）	- まちづくり委員会（総務、環境、安全、福祉、公民館） - 委員会（神社、財産区、ため地等）	- 各区組合員連絡協議会 - 連絡員（有給）
	隣組				- 組合（組・隣組：7-10 戸単位）	
	家庭					
規範	運営規則	- 飯田市条例 - 飯田市基本計画構想	- 公民館運営原則 （地域中心、普立、住民参加、機関独立） - 公民館規約		- 自治会規約 - 各委員会の運営規則	- JA みなみ信州規約 - 各種生産部会運営規則
	基本理念	- ムトス飯田	- 住民参加・共同 - 自助・自立 - 平等（子供の育成）		- 自治（自助・自立） - 参加・協働 - 平等・公平負担（子供の育成）	- 共同・参加 - 自助・自立 - 地域との連携・協力（子供の育成）

2004 年 9 月　大濱　裕　作成（改訂：2011 年 8 月）

5

2　飯田市における「地域自治」の智慧・経験・仕組み

（2）飯田市における「地域自治」からの学び：地域を織り成す「横糸・縦糸」

1　規範側面：ｼｽﾃﾑ全体を貫く「共通規範（参加・協働・自助・自立・平等）」の存在

2　組織側面：集落（区）自治と行政支援の地区ﾚﾍﾞﾙにおける統合・連帯・協働

3　資源側面：共有資源・施設の利用管理（共存への参加・協働の仕組み・能力・規範）

4　能力側面：資源・施設・ｻｰﾋﾞｽの機能的利用・管理能力と利害の協議・調整能力

5　制度側面：伝統的社会行政単位の認知・維持と飯田市としての統合のﾊﾞﾗﾝｽ

6

３　飯田市PLSDｸﾞﾙｰﾌﾟによるﾌｨﾘﾋﾟﾝ・ﾚｶﾞｽﾋﾟ市の現場ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄへの支援・協力

（１）タイトル：「ﾚｶﾞｽﾋﾟ市における地域自治強化を通じた貧困層住民」の生活改善支援」

（２）主体：JICA / 日本福祉大学 / 飯田市公民館・住民 / ﾚｶﾞｽﾋﾟ市職員・住民組織 等

（３）期間：2005年～2007年（3年間）

（４）予算：総額 5,000万円： JICA草の根支援ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

（５）目的：①貧困地域（2 ﾊﾞﾗﾝｶﾞｲ ： ｴｽﾀﾝｻﾞ / ﾌﾟﾛ）住民の生活給水状況の改善
②地域自治を支える地方行政・地域住民・NGO 等の意識変革、能力形成、参加・協働のﾒｶﾆｽﾞﾑの構築強化

（６）取組：①給水施設の建設
②PLSD研修の継続実施
③TWGの構築・強化
④飯田市・ﾚｶﾞｽﾋﾟ市の参加者相互間の訪問・学習（3年間継続）

7

３　飯田市PLSDｸﾞﾙｰﾌﾟによるﾌｨﾘﾋﾟﾝ・ﾚｶﾞｽﾋﾟ市の現場ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄへの支援・協力

（７）成果：①給水施設の完成と住民自身による維持管理の展開と施設普及の拡大
②住民組織（ﾒｸﾄﾞｩﾊﾟ / ｼﾌﾟﾏ）の形成・強化・拡大と村落開発委員会への参加
③ﾚｶﾞｽﾋﾟ市13部局による支援調整組織の形成と「条令」による制度化
④ﾚｶﾞｽﾋﾟ市、地域住民組織、NGO団体、ﾋﾞｺｰﾙ大学による「TWG（ﾃｸﾆｶﾙ・ﾜｰｷﾝｸﾞ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ：合同調整委員会）」の形成・展開
⑤関係者間における意識・価値規範（参加・協働・自立等）の変革と内在化
⑥飯田市側参加者による「地域自治」見直しへの意識・意欲の喚起

（８）備考：①ｽﾍﾟｲﾝ政府による開発援助ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの優秀事例 No.1に選定・表彰される。
②JICAから飯田・ﾚｶﾞｽﾋﾟ連携支援活動（第2ﾌｪｰｽﾞ）に対して資金援助（3年間・3,000万円）が内定される。

8

4　成果・到達点と今後の課題・展望

（1）成果・到達点

1　飯田市における支援活動

①海外ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ支援における行政、公民館、地域住民の参加・協働の実現

②飯田市における「地域自治」の実績・現状・課題に対する認識の深まり

2　日本の海外ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ支援に対する新たな「参加型ﾓﾃﾞﾙ」の構築・提示

①行政、公民館、地域住民、市場組織の連携・協力による継続的研修支援の展開

②単なる資金物資援助ではなく、「地域自治の構築・強化への経験・知識」を提供

③当事者相互間の訪問・交流・学習による「等身大の参加・協働・支援」の実現

9

4　成果・到達点と今後の課題・展望

（2）今後の課題・展望：「風と土の詩」の実現に向けた国際・国内的発信と連携

1　飯田市における新たな「地域自治」創造への模索

①飯田市における「ﾚｶﾞｽﾋﾟ支援ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」の拡大と地域住民・諸団体の参加促進。

②住民組織、市民グループ、行政、NPO等の「地域自治」構築への経験・知見の交流・参加・強化の促進。

2　飯田市からの発信と連携

①飯田市経験の地方自治体・市民団体・住民組織への発信と連携・協働ﾈｯﾄﾜｰｸの構築。

②JICA等の専門援助機関 / 大学研究機関への開発支援の理念・理論・実践手法の発信。

③PLSD研修を通じた「地域自治」を目指す国際的ﾈｯﾄﾜｰｸの構築。

10

ご静聴ありがとうございました

11

学輪 IIDA プロジェクト会議

報　告　資　料

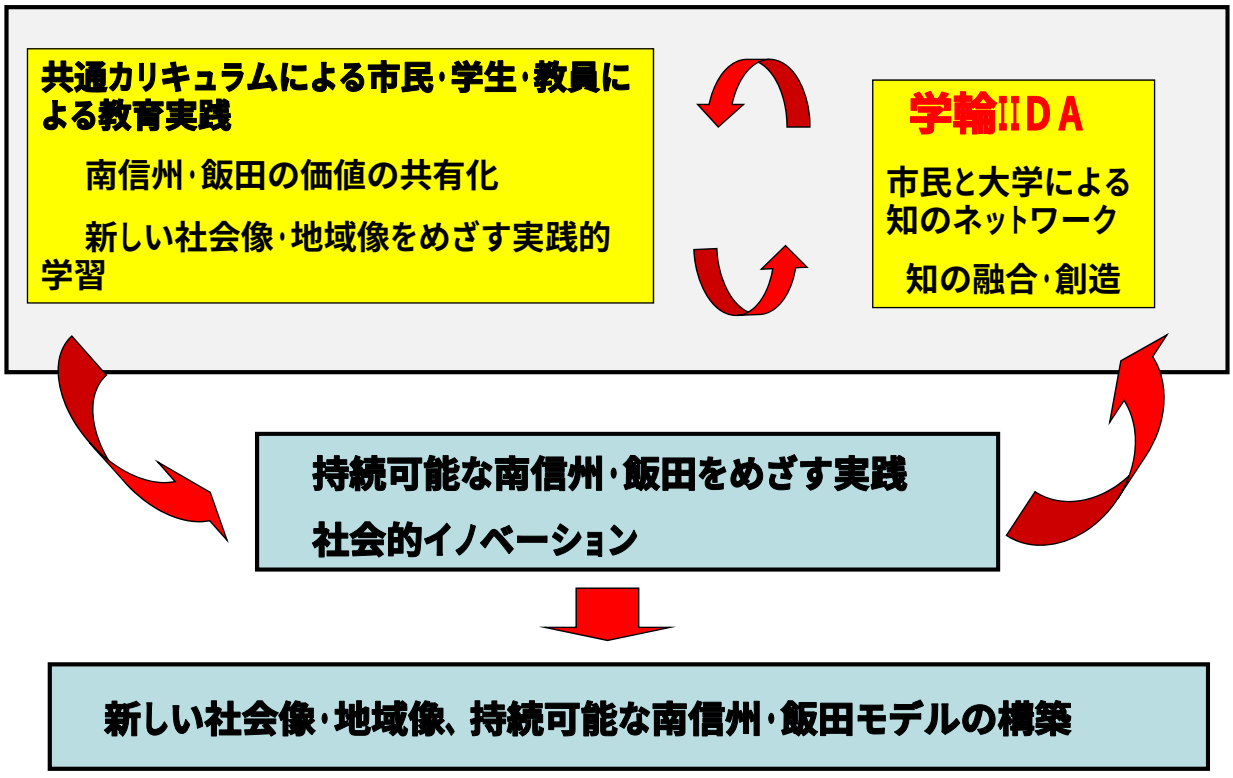
飯田大学連携会議「学輪IIDA」全体会

共通カリキュラム構築プロジェクト活動の報告

平岡和久（立命館大学）　福島　茂（名城大学）

1

共通カリキュラムの基本的考え方のイメージ



2

これまでの活動経過　プロジェクトの検討経過

第1回プロジェクト会議　【趣旨等の確認】（平成23年10月）
・各大学が持っている飯田の価値と飯田が意識している価値を集めて共有化することで共通カリキュラムを構築できないか。（学びの体系化）
・共通カリキュラムを構築することで、多くの大学が飯田に学び・集まりやすくなり、将来的に飯田を起点とした複数大学による連携モデルにつながる。

第2回プロジェクト会議　【意見交換】（平成23年12月）
・各先生からのシラバス案の説明　・共通カリキュラムのたたき台の検証
・各教授の専門講義等と飯田の事例を組み合わせてシラバス化できないか。
・共通カリキュラム構築に向けて目的、対象、視点、方法が大切。市民の参画も重要

第3回プロジェクト会議　【意見交換】（平成24年3月）
・共通カリキュラム構築に向けた実証実験として、モデルカリキュラムの作成と実践を複数の大学が連携しながら実施してみる
・先生方のシラバス案をもとに、モデルカリキュラムの企画案を作成し、その後協力できる大学が連携しながら実験的に実施してみる
・総務省「域学連携」地域づくり実証研究事業を活用してはどうか
→**「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」の実践**

3

モデルカリキュラム作成と実践に向けた取組

第1回実行委員会　（4月12日　立命館大学にて）
※モデルカリキュラム作成に関する打ち合わせ、方向性等の確認

第2回実行委員会　（4月20日　名城大学にて）
※モデルカリキュラムのテーマ、シラバス案に関する打ち合わせ

第3回実行委員会　（6月1日　立命館大学にて）
※モデルカリキュラムのシラバス案の検討、シラバス案の作成

第4回実行委員会　（6月29日　立命館大学にて）
※モデルカリキュラム最終案の作成

第5回実行委員会　（7月18日　飯田市にて）
※地元講師等も交え、モデルカリキュラムの実施に向けた打ち合わせ

「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」　カリキュラム作成

「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」　の実施　（8月27日～30日）

4

飯田大学連携会議 「学輪IIDA」

共通カリキュラム構築プロジェクト

【目的】

飯田に関わってきた各大学・教員が持っている飯田の価値を集約・共有化しそれをもとにした「モデルカリキュラム」を作成することで、飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルを構築する

【今年度の取組】

南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ

モデルカリキュラムの作成・実践・検証を通じて、地域と大学とが継続的に学び合うことができる「価値のある学習実践プログラムの構築」と将来的な大学での単位化を目指す

目的は一致 → **総務省への事業提案・事業の受託**

【総務省「域学連携」地域づくり実証研究事業】

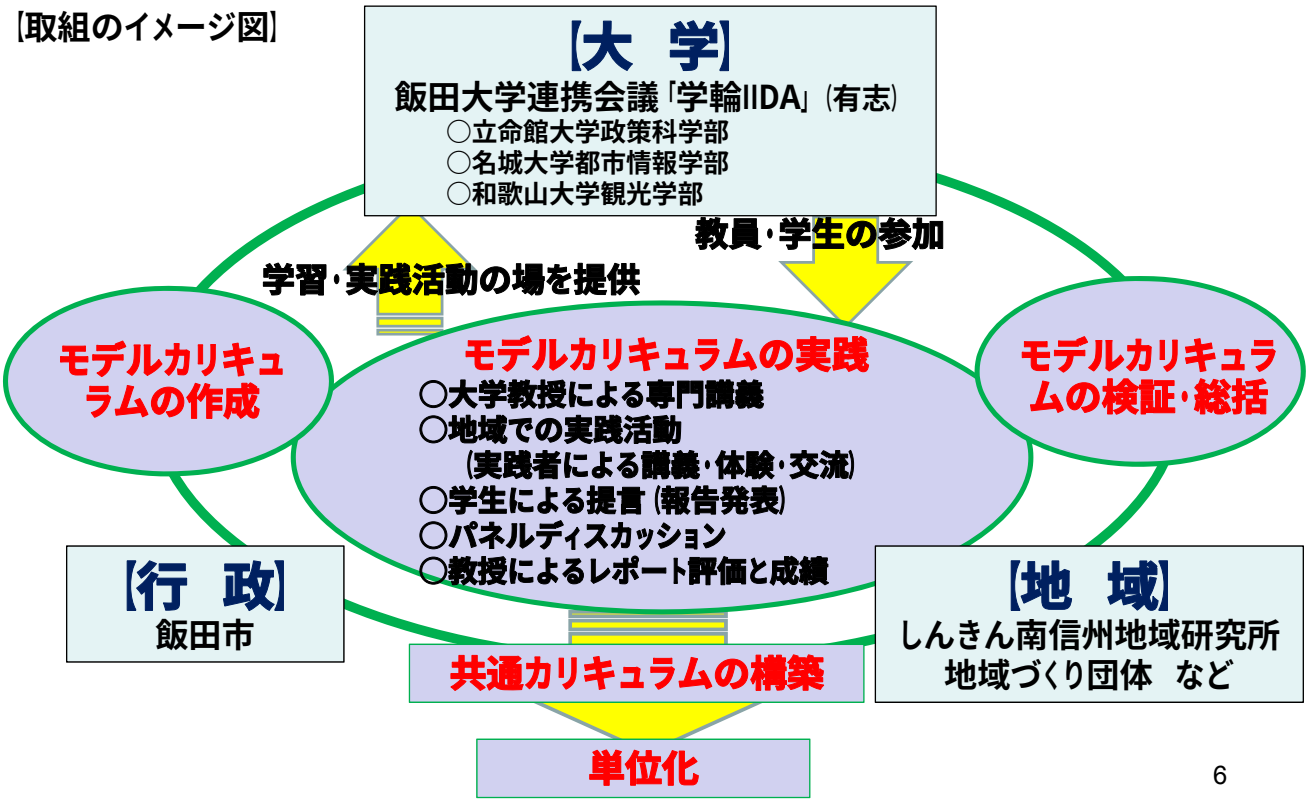
地域と大学が連携して、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組むことについて、大学の単位取得につながるカリキュラムづくりを行い、地域実践活動に取り組む

5

総務省 「域学連携」地域づくり実証研究事業

南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ

【取組のイメージ図】



6

南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ

モデルカリキュラムのシラバス

学習の組立

【大学の専門性】
複数の大学教授による講義・指導・評価

＋

【飯田でのフィールドスタディ】
地域づくり実践者等のよる講義・ヒアリング調査・農家民泊・ワークショップ　など

＝

双方の利点を活かしたオリジナルのカリキュラム

到達目標

目　的：地域の持続可能性について、その要因、要素の明確化する
テーマ：ソーシャルキャピタル（社会的関係資本）
南信州・飯田のソーシャルキャピタルを可視化し、持続可能な地域づくりとの関係について検証する

実施主体とシラバスづくりの経過

- 飯田市、しんきん南信州地域研究所、3大学教員によって計画
- 名城大学・福島茂によるシラバス案をもとに検討
- 地域での実践活動をされている講師の方々を交えての検討
- 飯田市における地元講師、フィールドワーク先の手配、調整

南信州ソーシャルキャピタル フィールドスタディの概要と到達目標

(1) テーマ： ソーシャルキャピタルとは

●近年、地域経営やガバナンスの在り方を考えるうえで、ソーシャルキャピタル (社会的関係資本) という概念が注目されている。

●住民自治や行政との協働を通じて地域の自立・自律を確立するためには、そこに住む人々のつながりと協力が前提条件となる。

●ソーシャルキャピタルとは「信頼・規範・ネットワークなどの社会組織上の特徴であり、地域社会の発展に不可欠な要素」と定義されている (R.パットナム、OECD他) 。

9

南信州SCフィールド・スタディの概要と到達目標

(2) フィールドスタディの到達目標

●このフィールド・スタディでは、ソーシャルキャピタルの概念・理論的枠組みを講義したうえで、フィールドスタディ、市民活動実践者の報告を含むワークショップ (WS) を通じて、南信州・飯田のソーシャルキャピタル (SC) を可視化し、その実態に触れられる機会を与える。

●ソーシャルキャピタルとは何か、ソーシャルキャピタルを育むもの、ソーシャルキャピタルを介した地域文化創造・まちづくりへの発現、「生活の質」への貢献について、受講生に能動的に考えさせ、理解させる。

10

南信州ＳＣフィールド･スタディの意義

- 南信州･飯田を「学び場」として学生が集まる意義として、①フィールド体験、②他大学の学生相互のグループワークを通じた知的な刺激の獲得があると考え、この教育価値を提供できるカリキュラムを考えてみた。
- 学びのアプローチは、
  ①理論（大学教員による講義）
  ②実践報告（ゲストスピーカーによる）
  ③フィールドワーク（グループ別現場体験）
  ④ワークショップ･総合セミナー
  ⑤事後レポート作成
  をパッケージ化したもの

11

南信州ＳＣフィールド･スタディの意義

- 近年注目されている「ソーシャルキャピタル」については、大学の座学だけでは学生に十分理解させることはできない。南信州･飯田には豊かなソーシャルキャピタルが蓄積し、それが地域文化創造･まちづくり･環境運動などに表出している。
- 飯田では、市と市民活動実践者の協力を得られるため、実践者の報告を聞く機会やフィールドワークの条件が整っている。
- ここに、南信州･飯田に学生が集う意義と価値があると考えた。本カリキュラムは、これを意識して作成している。
- 地域にとっては、大学の理論知に触れ、一緒にカリキュラムをつくることや学生とのかかわりを通じて自分たちの活動を振り返り、課題を考える契機になりうる

12

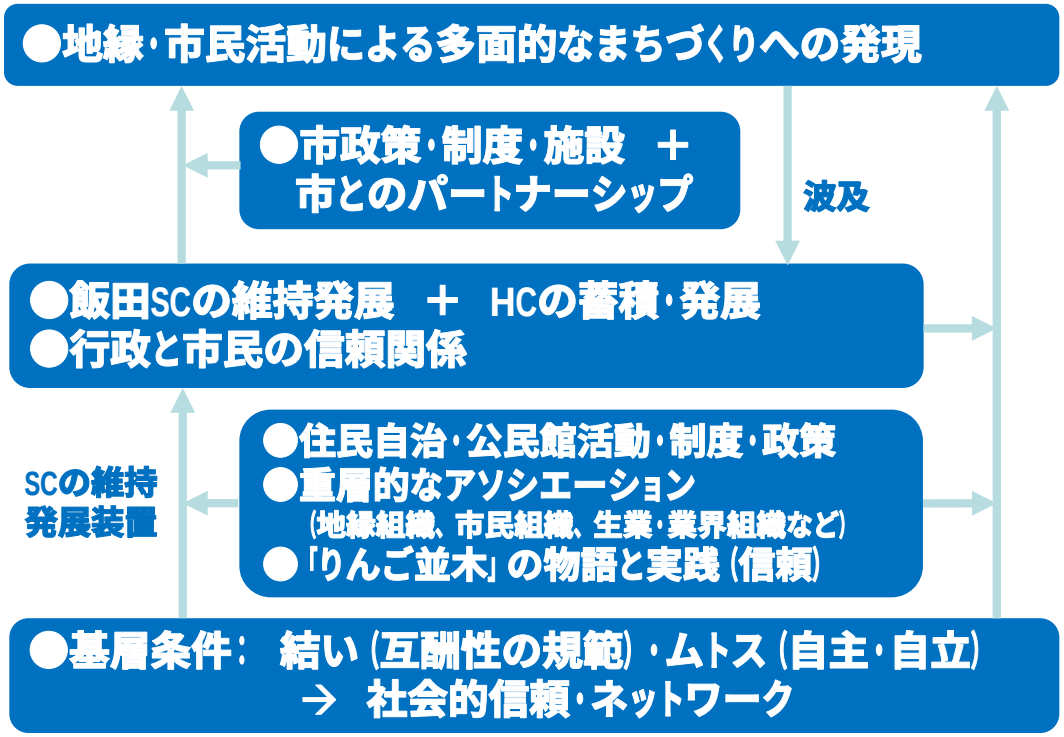
プログラム

全体講義	●基調講演：文化経済自立都市・飯田の挑戦　(牧野光朗飯田市長) ●柳田國男の「都市と農村」から読み取る飯田地域の可能性 (高橋寛治) ●ソーシャル・キャピタル概説 (福島　茂)	
FS1 地区自治 公民館	●講義：「飯田市の公民館活動と地域自治」　(長谷部三弘) ●学生WS ●自治会・公民館ヒアリング (＋公民館主事との意見交換) ●報告会　＋　●農家民泊	
FS2 市民活動	①りんご並木を取り巻く市民活動　(橋渡しSC) ②いいだ人形劇フェスタと市民運営　(本部・地区・市協働) ③体験型観光の受け入れ態勢づくり (農山村SCと市の協働) ④地域ぐるみ環境ISO研究会の取組 (産業界SC)	●講義 ●学生WS ●ヒアリング ●報告会
全体発表会 シンポジウム	●グループ別総合発表：「飯田のソーシャル・キャピタルについて」 ●パネルディsカッション： 南信州・飯田のソーシャルキャピタルと市民活動	

13

南信州・飯田ソーシャル・キャピタルの理解に向けて

飯田SCの培養・蓄積とまちづくり (仮説)



14

南信州ＳＣフィールド･スタディの成果

- 公民館主事や地縁組織、市民活動団体との意見交換や現地を見ることを通じて、学生がＳＣについて能動的に学ぶことができた。その意味で、大学の座学では学べないソーシャル･キャピタルの実体をやや間接的ではあるが、ある程度実感できたと思われる。また、特色のある社会･市民活動の実態についても学ぶことができた。

例：下久堅、座光寺における「結束型ＳＣ」と自治会･公民館活動によるＳＣの維持発展

りんご並木ネットワーク、人形劇フェスタ実行委員会による「橋渡し型ＳＣ」による市民活動の発展

15

南信州ＳＣフィールド･スタディの成果

- 異なる大学生によるグループワークや討議は、よい学びの刺激になり、教育効果がみられた。
- 従来の南信州フィールド･スタディに比べて、市民活動をされている講師の方からも、学生ときちんと意見交換ができてよかったと評価された。

南信州ＳＣフィールド･スタディ･学生アンケート結果

Q:フィールドスタディの内容をどの程度理解できましたか？
A：十分理解できた　１７％　　まあまあ理解できた　７５％　　(計９２％)
Q:今回のテーマであるソーシャルキャピタルは、興味が持てるものでしたか？
A：大変興味が持てた　５０％　　まあまあ興味が持てた　４２％　(計９２％)
Q:複数の大学が共同で学習･交流することをどう評価しますか？
A:大変良かった　７１％　　まあまあ良かった　２９％　　(計１００％)
Q:他大学の教員の指導
A:大変良かった　６３％　　まあまあ良かった　３７％　　(計１００％)

16

南信州ＳＣフィールド･スタディ･学生レポート

- **概ねＳＣ論に即した飯田の理解ができた**

  「結束型ＳＣ」と「橋渡し型ＳＣ」の具体的な理解など

- **自治会、公民館、市民活動についての内容をある程度理解できた**

  まちづくり委員会の仕組み、地区公民館の活動など

- **やや飯田の取り組みを美しくまとめているきらい**
- **自治会、公民館や市民活動の課題について一定の整理**

  例：高齢化と後継者問題、若い世代の参加など

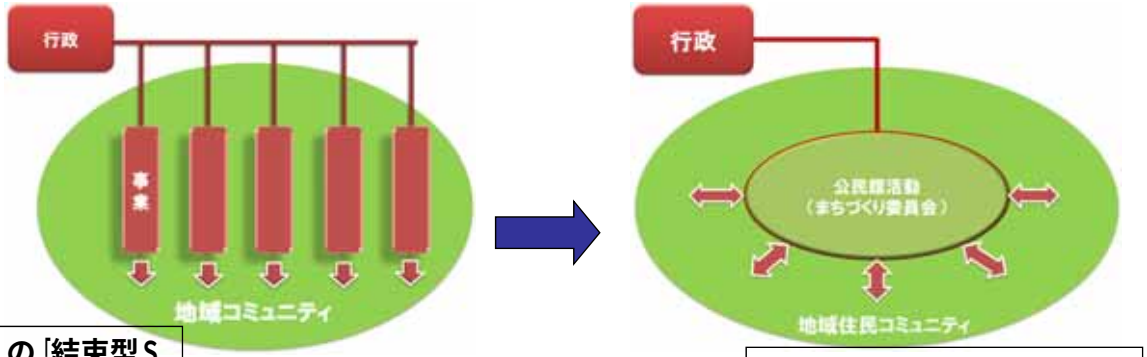
学生の成績評価

A判定：41%　　B判定：59%　　C判定：0%

概ね到達目標に達したと評価できる

17

学生レポートにみるＳＣの理解



「ムラ」の「結束型ＳＣ」と行政との関係

まちづくり委員会による「橋渡し型ＳＣ」と地域コミュニティの活性化

市民活動による「橋渡し型ＳＣの発達

「市民活動は地域文化の共有や人間関係の構築によってＳＣを培養させ、地域コミュニティ･市民社会力の向上に効果」

資料：学生レポートより引用

18

南信州ＳＣフィールド･スタディの課題･改善点

- テーマについて

今回取り扱ったソーシャル･キャピタルというテーマは、飯田の社会やまちづくりを理解するうえでのキーワードであるが、その実体を簡単に見せられないだけに、参加学生にとっても当初は捉えどころがないように映ったのではないか。最後のパネルディスカッション、レポート作成時の学習内容の総括を通じて、理解がより深まったのではないか。

(様々な主体による社会･経済･文化活動を「作物」に例えると、ソーシャル･キャピタルは「土壌」にあたるものである。豊かな「土壌」「土壌づくり」があって、豊かな作物が実る。しかし、作物と異なり、土壌は隠れているだけにわかりづらい。)

公民館主事や自治組織や市民活動団体関係者と協力して、どのように飯田のソーシャルキャピタルに触れさせ、理解させるか、もう少し検討する必要がある。時間に余裕があれば参与観察などのアプローチも考えられる。

19

南信州ＳＣフィールド･スタディの課題･改善点

- プログラムについて

毎日、学んだことを短時間にまとめて報告する必要があり、参加学生にとってはかなりのハードスケジュールとなった。

(特に、農家民泊を控えて時間制約が厳しかった2日目は、住民自治･公民館活動報告はパワーポイント作成に時間がかかり、まとまった報告をすることが難しかった)

最後の総合発表を除けば、パワーポイント作成よりも、報告内容の討議に時間をかけ、口頭のみの報告にする必要がある。

また、グループ編成も2回あり、チームワークを組み立てるのは大変であった。今回は、4名の教員が参加しており、1グループにつき、1名の教員がサポートできたことが、こうした困難さを補うことができた。

20

学輪IIDA共通カリキュラムとしての南信州SCフィールド・スタディ

- 当該カリキュラムは、課題・改善点はあるものの、学生が飯田に来て学ぶ価値のあるカリキュラムとなっており学輪IIDAの共通カリキュラムの一つと成りうる。

- また、共通カリキュラム一つの方向性を実証している。
  ①飯田ならではの学習素材に焦点を当てる
  ②座学・現場視察・関係者との意見交換・ヒアリング
  ③課題提示とWSなど大学混成グループワーク
  (②③：理論学習と現地でのより能動的な学び・実感)
  ④成果報告会、パネルディスカッション、事後レポート作成による学びの確認
  ⑤テーマ関連する関係者との意見交換
  →関係者にとっても何らかのミラー効果も期待できる

学輪IIDA共通カリキュラムとしての南信州SCフィールド・スタディ

- 主に1回生から3回生までの学生が参加したが、1回生でもある程度内容を理解できただけでなく、より刺激を受けたようにみえる。
- 今回のFSを契機とした学生による研究の展開がみられることは、カリキュラムの深化につながる可能性　カリキュラム → 実施 → 研究展開・蓄積、教育プログラムの改善 → カリキュラムへのフィードバック

今後の検討課題と計画

- 今後2年間でモデル授業による実験を蓄積し、共通カリキュラム案づくりにつなげる

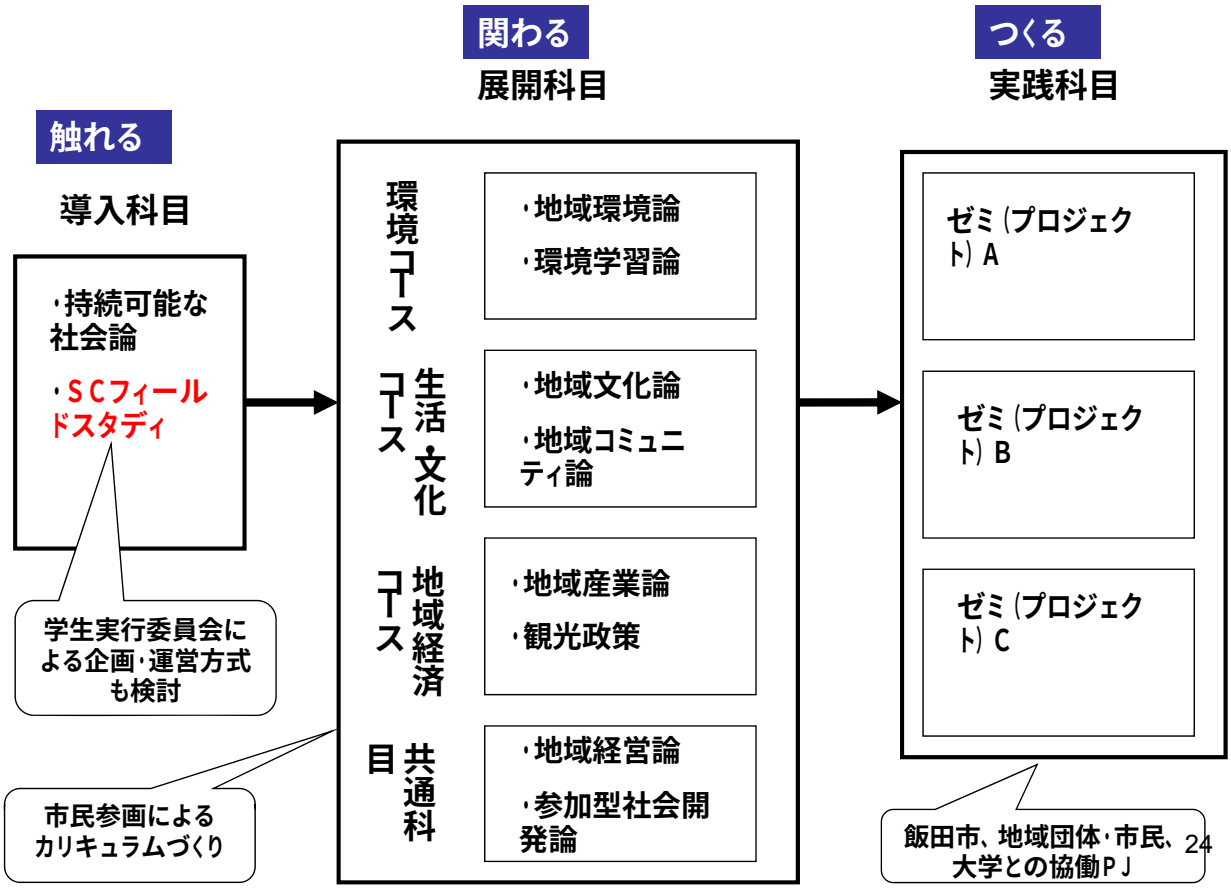
  環境とまちづくり、経済・産業、歴史と生活・文化、地域経営といった領域でモデル授業を計画・実施

  実施大学・教員を募集し、夏のＦＳの枠を使って実施

- 共通カリキュラムづくりへの市民参画の仕組みづくりと実践

23

共通カリキュラムのイメージ例



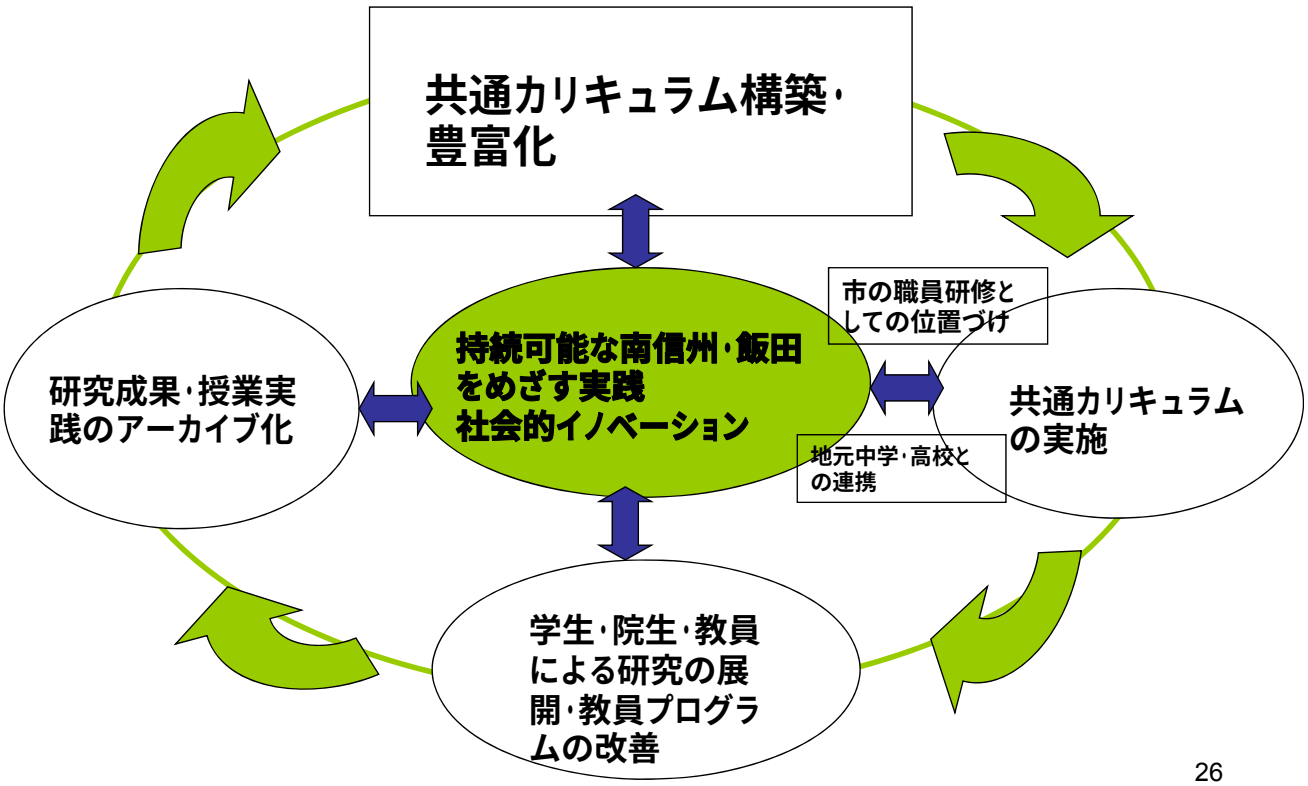
24

今後の検討課題と計画

- 研究者の論文だけでなく、授業実践や学生・院生のレポート・論文をアーカイブ化することを検討
- 地元の高校、中学などと連携を検討、模索
- 共通カリキュラムを職員研修としても位置づけることを検討
- 共通カリキュラムの実現に関わる課題についての検討

25

学輪ⅡＤＡ共通カリキュラムと研究蓄積の循環イメージ



26

南信州ソーシャルキャピタルフィールドスタディ　プログラム

日	時間帯 開始	終了	分	テーマ	講　師	会場・その他
1日目 (8月27日)	13:00	13:30	30	○趣旨説明・オリエンテーション		
	13:30	15:00	90	**1 飯田市の公民館活動と地域自治**	**長谷部　三弘　氏** (ひさかた風土舎代表)	飯田市公民館2階展示室
	15:15	16:45	90	**2 柳田國男の「都市と農村」から読み取る飯田地域の可能性**	**高橋　寛治　氏** (高野山大学客員教授)	飯田市公民館2階展示室
	17:00	18:30	90	**3 ソーシャルキャピタル論**	**福島　茂　氏** (名城大学教授)	飯田市公民館2階展示室
	20:00	21:30	90	＜公民館・住民自治活動フィールドスタディ＆WS＞ **飯田市の公民館活動について** (飯田市公民館の概要説明と公民館主事との意見交換)	飯田市の公民館主事	天竜峡温泉交流館　大広間
2日目 (8月28日)	9:00	10:30	90	＜公民館・住民自治活動フィールドスタディ＆WS＞ **4 フィールドスタディ・ヒアリング調査（グループ別）** FS1:公民館活動調査（公民館主事・関係者へのヒアリング）	公民館主事・公民館委員など	①橋南公民館　(担当：福島先生) ②座光寺公民館　(担当：平岡先生) ③下久堅公民館　(担当：藤田先生)
	10:45	12:15	90	＜公民館・住民自治活動フィールドスタディ＆WS＞ **5 フィールドスタディ・ヒアリング調査（グループ別）** FS2:住民自治活動調査（まちづくり委員会等関係者へのヒアリング）	まちづくり委員会・地区内の団体等	①橋南公民館（担当：福島先生） ②座光寺公民館（担当：平岡先生） ③下久堅公民館（担当：藤田先生）
	14:00	15:30	90	＜公民館・住民自治活動フィールドスタディ＆WS＞ **6 とりまとめ・発表準備**	各教授による指導	飯田市役所3階会議室
	15:45	17:15	90	**7 基調講義文化経済自立都市・飯田への挑戦**	牧野　光朗　(飯田市長)	飯田市役所3階会議室
	18:00			**農家民泊**（各農家との交流・聞き取り調査の実施）	各宿泊先農家	
第3日 8月29日	9:00	10:30	90	**＜SCと文化・環境・まちづくりへの発現＞**		
				8-①　りんご並木を取り巻く市民活動	**桑原　利彦　氏** (りんご並木まちづくりネットワークコーディネーター)	エコハウス　(担当：平岡先生)
				8-②　いいだ人形劇フェスタと市民運営	**高松　和子　氏** (いいだ人形劇フェスタ実行委員会委員長)	飯田市公民館　2階展示室1 (担当：福島先生)
				8-③　体験型観光と受け入れ態勢づくり	**高橋　充　氏** ((株)南信州観光公社代表取締役社長)	ごんべえ邑　(担当：藤田先生)
				8-④　地域ぐるみ環境ISO研究会の取り組み	**沢柳　俊之　氏** (地域ぐるみ環境ISO研究会事務局長)	飯田市公民館　2階展示室3 (担当：森先生)
	10:45	12:15	90	＜SCと文化・環境・まちづくりへの発現＞（全大会・ワークショップ）		
				9-①　りんご並木を取り巻く市民活動	**桑原　利彦　氏** (りんご並木まちづくりネットワークコーディネーター)	エコハウス　(担当：平岡先生)
				9-②　いいだ人形劇フェスタと市民運営	**高松　和子　氏** (いいだ人形劇フェスタ実行委員会委員長)	飯田市公民館　2階展示室1 (担当：福島先生)
				9-③　体験型観光と受け入れ態勢づくり	**高橋　充　氏** (南信州観光公社(株)代表取締役社長)	ごんべえ邑　(担当：藤田先生)
				9-③　地域ぐるみ環境ISO研究会の取り組み	**沢柳　俊之　氏** (地域ぐるみ環境ISO研究会事務局長)	飯田市公民館　2階展示室3 (担当：森先生)
	13:15	14:45	90	＜SCと文化・環境・まちづくりへの発現＞（関係者ヒアリング）		
				10-①　りんご並木市民活動調査	りんご並木まちづくりネットワークのメンバー	エコハウス　(担当：平岡先生)
				10-②　いいだ人形劇フェスタと市民活動調査	いいだ人形劇フェスタ実行委員会のメンバー	飯田市公民館　2階展示室1 (担当：福島先生)
				10-③　体験型観光等の受入態勢づくり調査	体験修学旅行等受入農家	ごんべえ邑　(担当：藤田先生)
				10-④　地域ぐるみ環境ISO研究会の取組調査	地域ぐるみ環境ISO研究会のメンバー	飯田市公民館　2階展示室3 (担当：森先生)
	15:45	17:15	90	**11 とりまとめ・発表準備**	各教授による指導	天竜峡温泉交流館大広間
	19:00	20:30	90	**12 SCと文化・環境・まちづくりWS　(仮報告会)**	各教授による指導	天竜峡温泉交流館大広間
第4日 8月30日	9:00	10:30	90	**13 総合発表会準備　(グループ別)**	各教授による指導	飯田市役所3階会議室
	10:45	12:15	90	**14 グループ別総合発表 飯田のソーシャルキャピタルについて**	各教授による指導	飯田市役所3階会議室
	13:15	14:45	90	**15 パネルディスカッション 飯田のソーシャルキャピタルについて**	コーディネーター：平岡先生 パネラー：福島先生・学生代表・地域住民	飯田市役所3階会議室

平成25年1月26日　学輪IIDA全体会公開セッション

飯田工業高校後利用プロジェクト

検討状況

この報告は、飯田工業高校の後利用に関する学輪IIDAのプロジェクト等における議論の経過や、調査内容を紹介するものです。

飯田工業高校後利用については、様々な視点からの検討と議論が必要だと思いますが、今後の検討材料となれば幸いです。

小畑力人（追手門学院大学）

長野県立飯田工業高等学校

今年の4月に新校に統合されるが、
平成25～26年度は飯田女子高校の
仮校舎として活用される。

プロジェクトの目的・検討の前提

平成25年4月に飯田新校に統合される「飯田工業高校の後利用」について、「教育的施設」として活用することの可能性について様々な視点から検証してみる。

プロジェクトの考え方

大学の現状等を踏まえつつ、以下の2つの視点で検討を進めていく

教育的施設の可能性について

①現在の取組からの積み上げ
飯田フィールドスタディ等の取組

と

②リニア時代を意識した「大学的機能」の視点
大学院大学・教育関係共同利用拠点制度 など

2つの視点で検討する

3

これまでのプロジェクトの取組

②リニア時代を意識した「大学的機能」の視点での検証

1　大学院大学の可能性調査

※大学院大学とは、学部を置くことなく 大学院のみを置く大学

岐阜県情報科学芸術大学院大学の視察

○岐阜県が廃校になった高等学校の校舎等を利用して開校
○1研究科1専攻の修士課程（2年）で、1学年20名の定員
○少数精鋭の教育　・学際的な教授陣　・プロジェクト重視の実践教育
　産学官連携の活動
○予算は、約5億6千万円。うち事業費は約2億円。
　（事業費は4年間で約40％減少）

4

【昨年度のプロジェクトでの考察】

○18歳人口が減少するなかで、地方大学が安定的に学部生を集めることは容易ではないが、飯田の資源やセールスポイントを活かし、学輪IIDAの教員間のネットワーク活用することで、**大学院大学の設置可能性はあるのでは**

○飯田に来れば、様々な大学・研究者とつながりが持てることは、大きな魅力であり重要なポイントである

○経営を考えた時、岐阜県の事例等、**財政上の“困難”をしっかり見ておく必要がある**

○この地域に必要とされる大学とは（飯田で何を学ぶのか）どのような人材を育成するのかなど、**明確な理念やコンセプトが必要**ではないか

5

【昨年度の学輪IIDA全体会（内部討議）での主な意見】

○誰を対象に、何を学び、どのような人材を育成するのかといった**「理念やコンセプトについて」、更なる検討が必要**ではないか

○「飯田で何を目指すか」ということが重要

伝統工芸は、1つ重要なキーワードになるのでは。日本全体を見ると、素晴らしい工芸が全国各地にたくさんあるが、それがうまく継承されていない。そういったものが飯田に集積しており、飯田に来ると教育を受けることができるという状態にできないか

○施設の具体的な活用は、理念やコンセプトが決まった後に検討すべきではないか

6

【今年度のプロジェクト会議等での検討】

○施設の活用に目が行きがちだが、まずは**理念やコンセプト**（飯田で何を学ぶのか等）の検討が重要

○共通カリキュラム構築プロジェクトでは、飯田で何を学ぶのか(学べるのか)、飯田を価値を共有化するモデルカリキュラムの作成と実践を試みた

○これまの検討や試みを踏まえ、**伝統工芸を飯田で学問的に組み立てる**ことができないか

○**「伝統工芸の技術の継承と創造」をテーマに、「ものづくり」と「デザイン」と「マーケティング」を総合的に学ぶ**ことができないか

○飯田女子短期大学との連携し、**「食」や「食文化」等をテーマにした共同研究、共同プログラム**が実践できないか。

【今後の取組に向けた提案】

視点①現在の取組からの積み上げ

○教育的施設としての可能性について
※理念・コンセプトが重要
「飯田で何を学ぶのか・どのような人材を育成するのか」

→**※理念・コンセプトを実現するために必要な教育**
「教育目的の達成に必要なカリキュラムの構築」

→**※教育を実施するために必要な施設**
（有効な施設の活用方法を検討する）

このような形で進めていくことができないか

○理念・コンセプト

※飯田で何を学ぶのか　(飯田が故に学べるもの)

→例えば「**伝統工芸の技術の継承と創造**」や「**食・食文化**」

※どのような人材を育成するのか

→これからの飯田に必要な人材・これからの日本に必要な人材

○モデルカリキュラムの構築

例えば、**日本の伝統工芸や技術(消失しつつあるが価値のあるもの)を見つめ直し、それをデザインする　(付加価値を付ける)ような「モデルカリキュラム」を作成し、実践できないか**

そのようなモデルカリキュラムの作成や実践を、複数の大学が連携しながら、地域とともに実施できないか

○このようなモデルカリキュラムを構築しつつ、具体的な施設の活用方法を検討していく

【伝統工芸の技術の継承と創造】
～飯田で学習する際のシラバスとなる材料～

例えば

○共通科目
- ・マーケティング論
- ・デザイン論
- ・地域経営論

○飯田市の産業
- ・飯田市の産業史
- ・現代に残る飯田市の伝統工芸

○都会、海外で注目されている伝統工芸

○実習
- ・水引体験と商品の提案
- ・ひさかた和紙の体験と商品の提案　など

視点②：リニア時代を意識した「大学的機能」の視点

大学における教育課程の共同実施制度に関する提言など

○中央教育審議会答申　我が国の高等教育機会の将来像（H17）
・高等教育機関相互のコンソーシアム(共同事業体)形成支援や高等教育機関を各とした知のクラスターの形成支援の充実が重要
・設置形態の枠組みを超えた高等教育機関の連携協力による教育・研究・社会貢献機能の充実と強化の推進

○教育再生会議　社会総がかりで教育再生を-第２次報告-（H19）
・国公私を通じた「大学地域コンソーシアム」や大学院の共同設置
・国は国公私を通じ複数の大学が大学院研究科等を共同設置できる仕組みを創設する。

○経済財政改革の基本方針2007　（H19.6.19閣議決定）
【大学・大学院改革】
・国公私を通じ複数の大学が大学院研究科等を共同設置できる仕組みを平成20年度中に創設することを目指す

11

中央教育審議会答申　平成24年8月28日

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

【求められる学士課程教育の質的転換　からの抜粋】

○生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要。

○従来の教育とは質の異なるこのような学修のためには、学生に授業のための事前の準備、授業の受講や事後の展開を促す教育上の工夫、インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験といった教室外学修プログラム等の提供が必要。

※サービス・ラーニングとは、教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム

12

共同教育課程

（共同実施制度・共同大学・共同大学院など）

○複数の大学がそれぞれ優位な教育研究資源を結集し、共同でより魅力ある 教育研究・人材育成を実現するものとして、平成21年に新たな大学間連携の仕組みとして整備

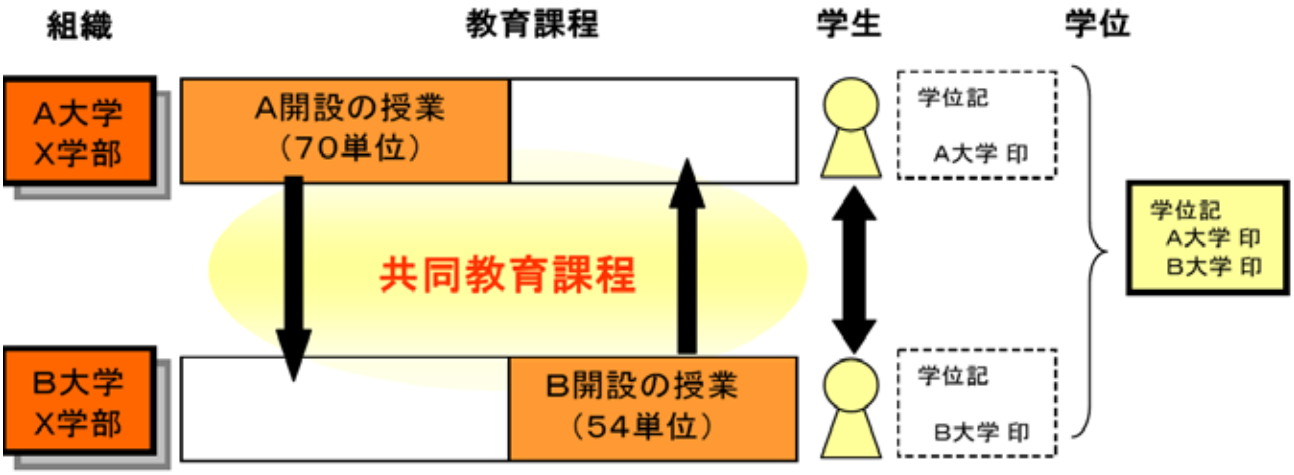
○大学・大学院・短期大学・専門職大学院において、複数の大学が共同で教育プログラムを編成する教育課程

○構成大学のうち他の大学における授業科目の履修を自大学の授業科目の履修とみなす

○授業科目を自ら開設することの特例

13

■学部段階の場合のイメージ



※構成大学のうちの他の大学における授業科目の履修を自大学の授業科目の履修とみなす。

※授業科目を「自ら」開設すること（大学設置基準第19条）の特例

出典：文部科学省HP

14

共同教育課程をおく大学

○学部　※国立大学の獣医学部同士による共同教育課程

・帯広畜産大学と北海道大学による共同獣医学課程　(2012年)

・岩手大学と東京農工大学による共同獣医学科　(2012年)

・鹿児島大学と山口大学による共同獣医学部　(2012年)

○博士後期課

・東京女子医科大学と早稲田大学による共同先端生命医科学専攻 (2010年)

・東京都市大学と早稲田大学による共同原子力専攻　(2010年)

・東京農工大学と早稲田大学による共同先進健康科学専攻 (2010年)

・愛知教育大学と静岡大学による共同教科開発学専攻 (2012年)

15

連合大学院

○2以上の大学が協力して教育研究を行う研究科をおくことができる方式として、「共同教育課程」の他に「連合大学院」等と呼ばれる方式がある

○連合大学院は、基幹となる研究科に組織を設置し、教員・学生は基幹校に所属し、基幹校の名義の学位を出す

○共同教育課程は、すべての構成大学に組織を設置し、教員・学生はすべての構成大学に所属し、すべての構成大学の連名で学位を出す

○例えば、東京学芸大学、横浜国立大学、千葉大学、埼玉大学よりなる東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（教育学の博士課程）がある。

16

大学院修士課程　学位取得プログラム

大学院修士課程の修了要件

標準修業年限は2年、修了に必要な単位（標準で30単位以上）を取得し、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査及び試験の合格が必要

※例えば　飯田に大学院大学を設置した場合　（2年間で30単位を想定）

30単位のうち12単位は修士論文、残りの18単位を2年間で取得するとすれば

◯修士課程1年前期で3科目6単位　（半年で６単位）
◯修士課程1年後期で3科目6単位　（半年で６単位）
◯修士課程2年前期で3科目6単位　（半年で６単位）　の**計18単位**
修士論文の12単位と合わせれば修了に必要な単位数を取得

・1科目（2単位）は90分間の講義15コマ。これは今年度共通カリキュラム構築プロジェクトで実施した「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」と同じ時間数
・1週間に90分間の講義を3コマを、前期（半年）の受講することで6単位取得

17

「知床自然大学院」（仮称）設立の向けた取組

◯世界自然遺産・知床を学びの場として、野生生物保護などの即戦力を育てる**専門職大学院の設立準備を進めるため**、民間有志による一般財団法人「知床自然大学院大学設立財団」が1月10日に北海道斜里町で発足

◯**環境問題に取り組む初の専門職大学院**として2017年度の開学を目指す

◯**学校法人の運営による2年制の専門職大学院大学**

◯**学生、教員を合わせて120人以内を想定**し、講義室や実習・研究棟、標本庫、図書館、学生会館などを配置する

◯カリキュラムは、野生生物学や地域経済学などの必修科目のほか、環境法学、エコツーリズム学などの選択科目も用意する

◯**開学に必要な資金は**、校舎建設費や設備費、備品費に３億円、運営費に２億円の**計５億円**を見込む

2013年1月11日朝日新聞

18

京都美術工芸大学

◯2012年4月に開校した、**日本で唯一の「工芸学部」を持つ**私立4年制大学。工芸・文化財修理・建築・デザインを学ぶ

◯1年次から2年次前期までは、入学時に選択した4つの実習分野（陶芸分野、木工分野、漆芸分野、彫刻分野）の基礎技術を習得

◯2年次後期からは、**「伝統工芸」「文化財修理」「建築」「工芸デザイン」**の4コースに分かれ、それぞれの実習を通して、専門知識・技術を高める

◯実習のみならず幅広い教育体系をとおして、**日本の文化や工芸を世界に向けてプロデュースできる広い視野を持つ人材の育成**をめざす

京都美術工芸大学HP等から

終わりに

※飯田工業高校の後利用に関する具体的な検証はこれからですが、
※教育的な施設(高等教育機関）としての可能を検討していくためには、
※**この地域が必要とする高等教育機関**について
※**地域の様々な主体が協働で知恵を出し合い、検討を重ねていく**ことが必要であり
※**私達大学関係者も一緒になりながら**
※**その可能性を検討していきたい**と考える

ご静聴、ありがとうございました

「知床自然大」17年目標

今春から活動 寄付金5億円目指す

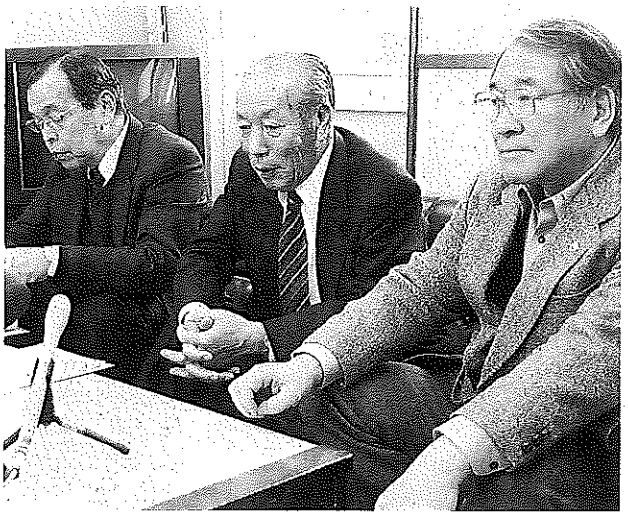
午来氏ら会見

【網走】野生生物保護管理などを学ぶ専門職大学院をオホーツク管内斜里町に創設するための「知床自然大学院大学設立財団」の設立者となる元斜里町長の午来昌（こらいさかえ）氏らが10日、網走市内で記者会見し、20日前後に設立登記すると発表した。当初2016年としていた開学目標は17年4月とし、寄付金集めなど今春から活動すると説明した。

出席したのは、設立者の午来氏と知床グランドホテル（斜里）会長の上野洋司氏、代表理事の東京農大（網走）教授の田中俊次氏ら。午来氏らは、開拓跡地を募金で買い取る「知床100平方㍍運動」が日本のナショナルトラスト運動の先駆けとなり、世界自然遺産にも指定された知床は自然保護の人材育成に最適の立地と強調。全国でクマ、シカ、イノシシなど野生動物と人間のあつれきが強まり、地方自治体などで問題解決に専門的な人材の需要が強まると説明した。

大学院の具体像として、「1学年40人で2年制」「ロシアや中国からの教員・学生の受け入れ」などの試案があるとした。

寄付金の目標については開学に3億円、1年間の運営費2億円と想定し、最低限5億円を集めると説明。田中氏は「知床から自然保護を発信する構想への共感を広げ、個人や企業から広く寄付を集めたい」と話した。



知床自然大学院大学の構想について語る（左から）設立財団の代表理事の田中氏、設立者の午来氏、上野氏＝網走市のオホーツク総合振興局

知床自然大学 目指すぞ開学

16年斜里に 有志が計画

野生生物の専門家養成 設立財団近く発足

【斜里】世界自然遺産・知床をフィールドに、野生生物管理のための人材を育成する「知床自然大学」の実現を目指し、民間有志による設立財団が近く発足する。特定の専門家を育てる専門職大学院とし、2016年開学を目指す。財団は20億円以上を見込む開学資金集めや、学校法人認可の準備を進める。

大学院は、オホーツク管内斜里町内に設置。ヒグマやエゾシカ、本州のツキノワグマなど、野生生物管理の専門家を養成する。専門職大学院は設置基準が緩やかで、定員を数十人として運営費も比較的少なく済むという。

財団の代表は、元斜里町長の午来昌（ひるいまさかえ）氏と知床第一ホテル（斜里）会長の上野洋司氏。一般財団法人として設立し、税制面で有利な公益財団法人への移行を目指す。定款や事業計画はできており、構想をアピールしてきた北大名誉教授の大泰司紀之（おおたいしのりゆき）氏らも加わる。札幌や東京で講演会を開き、構想をアピールしたい」と話している。

午来氏は「知床で学び合い、知床の生物多様性の価値を発信する場にしたい」と話している。

知床自然大学構想は1986年、斜里町の第3次総合計画に盛り込まれたが、財政悪化で具体化されなかった。昨年2月、町の大学構想づくり協議会が専門職大学院の構想案を町に提出後、行政の動きは止まっている。07年に民間人が設立した知床自然大学ワーキンググループが母体になり、民間主導で開学を目指すことになった。

専門職大学院 特定の職業に必要な高度な専門知識を持つ人材養成を目的に、2003年度に制度が創設された。ビジネスや会計などを専攻分野にし、法科大学院もその一つ。課程は原則2年以内（法科大学院は3年）で、一般的に大卒以上を入学資格とする。既存の大学に併設する例が多く、全国に130あり、このうち道内では5大学が併設する（12年9月現在）。職業に応じた実践的なカリキュラムを特徴とし、授業は実習やフィールドワークが中心。12年度の全国の学生数は約2万人。

パネルディスカッション

資　　料

パネルディスカッション

【テーマ】　「地域と大学とのによる地域づくりの可能性について」

【コーディネーター】　牧野　光朗　（飯田市長）

【パネリスト】

○朝岡　幸彦　氏

（東京農工大学大学院教授／環境教育、社会教育・生涯学習）

○高松　和子　氏

（飯田女子短期大学学長職務代理(教授)／いいだ人形劇フェスタ実行委員長）

○桑原　利彦　氏

(IIDAWAVE ヘッドプロデューサー／りんご並木まちづくりネットワークコーディネーター)

【趣　旨】

近年、大学（研究者や学生）が教育・研究活動として地域に入り、地域住民とともに地域課題の解決に向けた学習や地域おこし活動を実践する取組が増えています。

このような取組は、大学の持っている情報、知識、技術が地域づくりに活かされるとともに、地域を担う人材の育成や地域振興など地域の活性化につながることが期待できます。また大学にとっても、キャンパス内だけでは学ぶことのできない学習や実践の場を得ることができ、若者達の地域づくりに対する理解の促進や、教育・研究活動の成果を地域に還元することができるなど、地域・大学双方にとって価値のある取組であると考えます。

学輪 IIDA の取組も、様々な大学とネットワークを構築しながら、地域と大学がつながりともに学び合うことで、想像力や創造性を持って地域をデザインできる人材の育成や、活力ある地域づくりを実現していこうとする試みです。

今回のパネルディスカッションでは、飯田と関係の深い東京農工大学大学院の朝岡先生、南信州・飯田フィールドスタディなどを通じて多くの大学の調査や学習に関わっている高松和子先生や桑原利彦氏からそれぞれの立場でご発言いただくなかで、地域と大学との連携による地域づくりの可能性について考える機会とします。